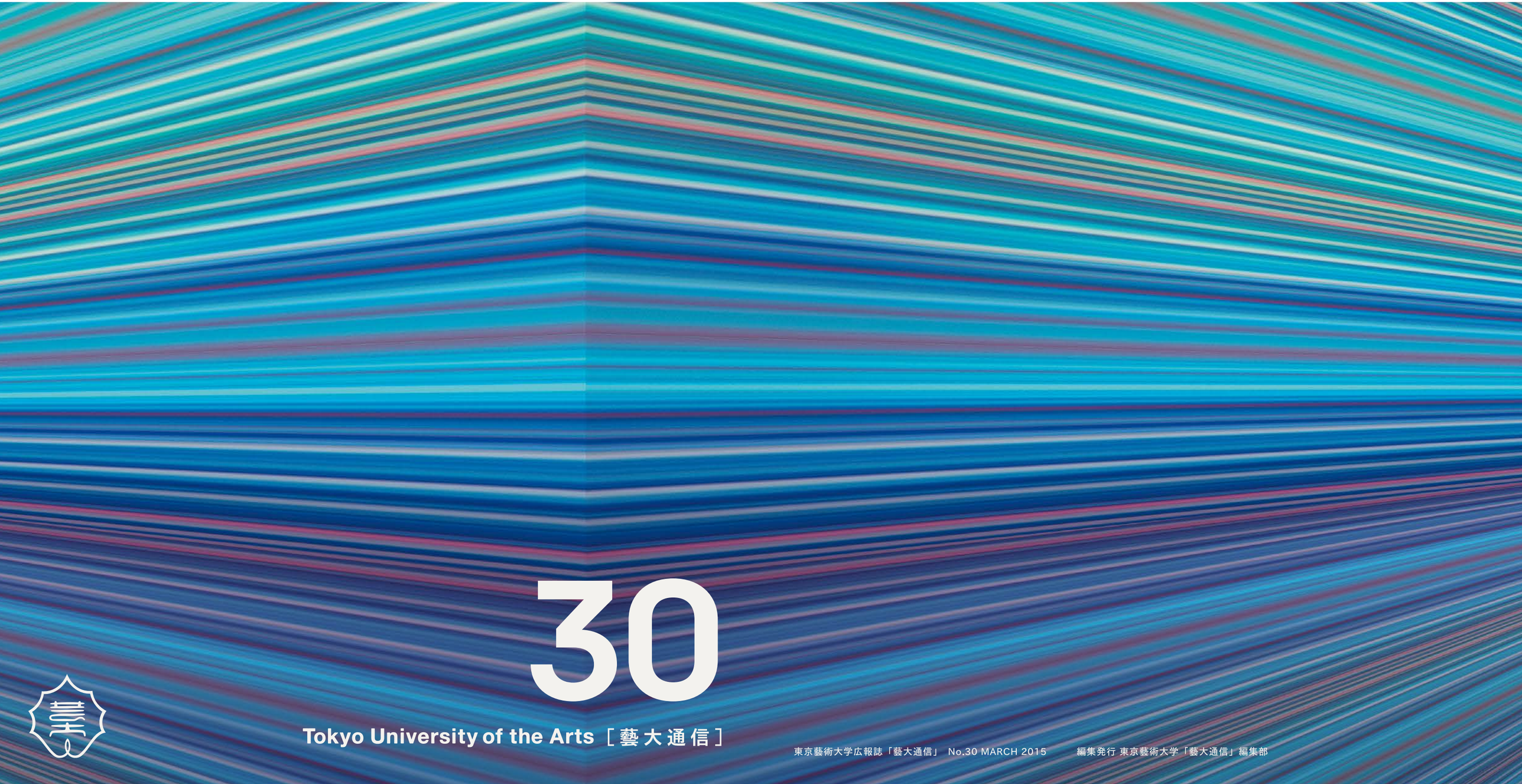
GEIDAI TSUSHIN



30

Tokyo University of the Arts［藝大通信］

東京藝術大学広報誌「藝大通信」 No.30 MARCH 2015　　編集発行 東京藝術大学「藝大通信」編集部

唐土廿四孝

大舜

父は瞽瞍といふ盲ゝ
名を象といふ継母の
うむ所の父母をうやまひ舜
をゆくむ支へあつべく
象をそうそうこれ教
さんとまること度々あれ
ども少しも恨めるいろ
なく両親ゆつゝみを
愛顧するといふく深
孝心天に感じ田地
耕すに鳥下りて芸り
象は業を助く時の
天子堯帝はめき
さて娥皇女英といふ二
人の内女を舜に娶せ
王位をゆづりあたへぬ

種員謹記

一蝶齋
國貞

GEIDAI Gallery
Vol. 10

「唐土廿四孝」

「唐土廿四孝」の基は24人の孝行者を描いた文学で、元の時代、郭居敬が選んだ『全相二十四孝詩選』が現存最古といわれている。本書は歌川国芳による中判24図の揃物で、折本仕立となっている。刊行年・版元不明。
（附属図書館蔵）

GEIDAI TSUSHIN 30 | 目次

2 GEIDAI Gallery Vol. 10
唐土廿四孝

5 Special Feature: Disability and Art
特集 —— 大きく広がる「障がいとアーツ」の輪
松下 功

12 Professor Interview
同志対談 —— 教員は語る　第 22 回
尾登誠一 × 坂口寛敏

16 Visiting the Laboratory　Nihonga Studio No.3
研究室探訪　Vol. 9
日本画 大学院第三研究室

20 Student Interview
学生インタビュー　Vol. 1
杉山由香　岡本誠司　曽根光揮

22 Interview with a Graduate
卒業生に聞く　第 9 回
石井幹子

26 History of Geidai in Art and People
歴史を彩る人・作品
—— 総合芸術アーカイブセンターの研究から　第 1 回
伊澤修二 東京音楽学校
初代校長の胸像をめぐって
橋本久美子

29 Topics　[2014.8–2015.2]

31 News

30 編集後記

藝大通信

No.30

GEIDAI TSUSHIN
東京藝術大学広報誌
藝大通信　第 30 号

・編集発行
東京藝術大学「藝大通信」編集部

・編集委員
松下 計（美術学部デザイン科教授・編集長）
八谷和彦（美術学部先端芸術表現科准教授）
吉田浩之（音楽学部声楽科教授）
鈴木純明（音楽学部作曲科准教授）
磯見俊裕（大学院映像研究科映画専攻教授）
大石 泰（演奏芸術センター准教授）

・アートディレクター
松下 計
・表紙デザイン
松下 計
・撮影
堀口宏明
塚田史子（美術学部附属写真センター）
・制作
株式会社 平凡社
・発行日
平成 27 年 3 月 24 日

・お問い合わせ先
東京藝術大学総務課
〒 110-8714　東京都台東区上野公園 12-8
電話　050-5525-2026
FAX　03-5685-7760
E-mail　toiawase@ml.geidai.ac.jp
URL　http://www.geidai.ac.jp/

特集

大きく広がる「障がいとアーツ」の輪

副学長　松下功

東京藝術大学では、「障がいとアーツ」というプロジェクトを主催し、二〇一四年に四回目を迎えました。これは、障がいを持つ方もそうでない方も、分けへだてなく一緒に楽しむことのできる空間をつくり、多くの人たちが共有できる芸術の新しい姿を提示し探求しようとする大切な事業です。例年、音楽・美術・書道・スポーツなど、いろいろな分野で活躍されているたくさんの方々が参加してくださいます。今年も十二月五日（土）・六日（日）に開催しますが、今後は二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックも視野に入れて、大きく展開していこうという計画です。

このプロジェクトを中心になって推進してきた松下功副学長に、これまでどのような活動を繰り広げ、これからどのように展開していきたいか、語っていただきました。

「みんなで家をつくろう！」で完成した家を囲んで。前列右端は松下副学長。その左は宮廻正明社会連携センター長

日々の活動の総決算

二〇一一年に第一回を開催した「障がいとアーツ」は、参加していただく方々も次第に増え、文化庁をはじめ、いくつもの組織や企業のご協力をいただいて、毎年新たな試みを行っています。二〇一四年開催の第四回では、東京オリンピック・パラリンピックの組織委員会や、内閣府の方々、また各地の大学も、この「障がいとアーツ」にたいへん興味を持っていただいて、多くの方々にいらしていただきました。新聞や雑誌などにも紹介されて一般の方々にも知られ、活動の輪が大きく広がってきています。

奏楽堂を、舞台はもちろん客席からホワイエまで使って開催する「障がいとアーツ」の企画は、演奏藝術センターが開設する授業「障がいとアーツ」を受講する美術・音楽の学生たちと共に、四月から通年で行ってきた活動の総決算の場でもあります。

授業では障がいについて理解を深めるための研究を行い、視覚障がいのヴァイオリニスト川畠成道（かわばたなりみち）さんや、社会福祉法人愛成会の小林瑞恵（みずえ）さんに来ていただいて、障がいと芸術活動についていろいろなお話をしていただきました。また、愛成会や筑波大学附属大塚特別支援学校にうかがって演奏会を開き、共同で作品の制作を行って交流を深めてきました。

視覚障がいの画家エムナマエさんにも授業に来ていただき、アイマスクをつけた「めかくしおえかき」を体験してみました。すると、参加者は思っていた以上にうまく絵が描けたことに驚いたのです。開催当日、会場でのワークショップでも、子どもたちのリクエストに応えて、ナマエさんはいろいろな絵を描いてくださり、子どもたちは大喜びでした。

「上手に描こうなんて思わなくていい。描きたいものを自由に描いていいんだよ」とナマエさんは言います。こうした経験により、ふだんは気がつかない自分の才能を発見するのですね。確かに、上手にできただけでは面白くありません。失敗してもいいのだという勇気を持つことです。自分にいいたいことがあるかどうか、そのメッセージが大切。その人が持っているメッセージを引き出すのが、本当の教育ではないかと思っています。

この授業では、美術と音楽の学生たちから、それぞれ自分の分野を生かせるようなさまざまなアイディアが提出され、次々と実現されています。こうした実体験をいくつも行って、十二月の本番の日を迎えるのです。

「共に生きる」ことをめざす

一般に「障がいとアーツ」というと、障がい者に聴いたり見たりしてもらう演奏会や展示会といったイメージですが、もっと踏み込んで、障がい者も舞台に乗ったり、一緒に絵を描いたりして共に楽しむことが大事なのではないかと思うのです。何かを教えるといった上から目線ではなく、同じ目線で、共に感じ合い、楽しみ合い、尊敬し合う場をつくりたい。

また、普通こうしたイベントでは、知的障がいと身体障がいを分けるのですが、私たちはそうした区別をしません。コンサートでも

静かに聴くだけでなく、声を出してもＯＫ、多くの人たちにそれぞれ、体験してほしいのです。

このように、すべての障がい者と共に表現することを通して「共に生きる」ことをめざし、「障がいとアーツ」を続けてきました。

忘れもしません、私が初めて藝大で授業をした日、クラスには全盲のヴィオラ専攻の学生がいました。彼は耳がものすごくよくて、才能もありますが、彼に対して楽譜を使って講義することはできないので、すべて言葉と音でわかるように説明します。私は伝達と表現というものの重要性を改めて教えられました。

彼は盲導犬を連れて授業に出ていたのですが、そうするとみんなが彼のことを大事にします。クラスの気持ちが和んで、とてもいい雰囲気になってくるのです。社会にはいろいろな環境の人たちがいて、共に生きることが大切なのだ、と深く思いました。これが「障がいとアーツ」の私なりの原点になっているのです。

障がいを持った人たちは、ひとりでは難しくとも、一緒に生きれば、社会で楽しく生きていけます。彼らが生きるということを大切にし、そこから私たちが学んでいかなければならないと思うのです。

障がい者に学ぶアーツ

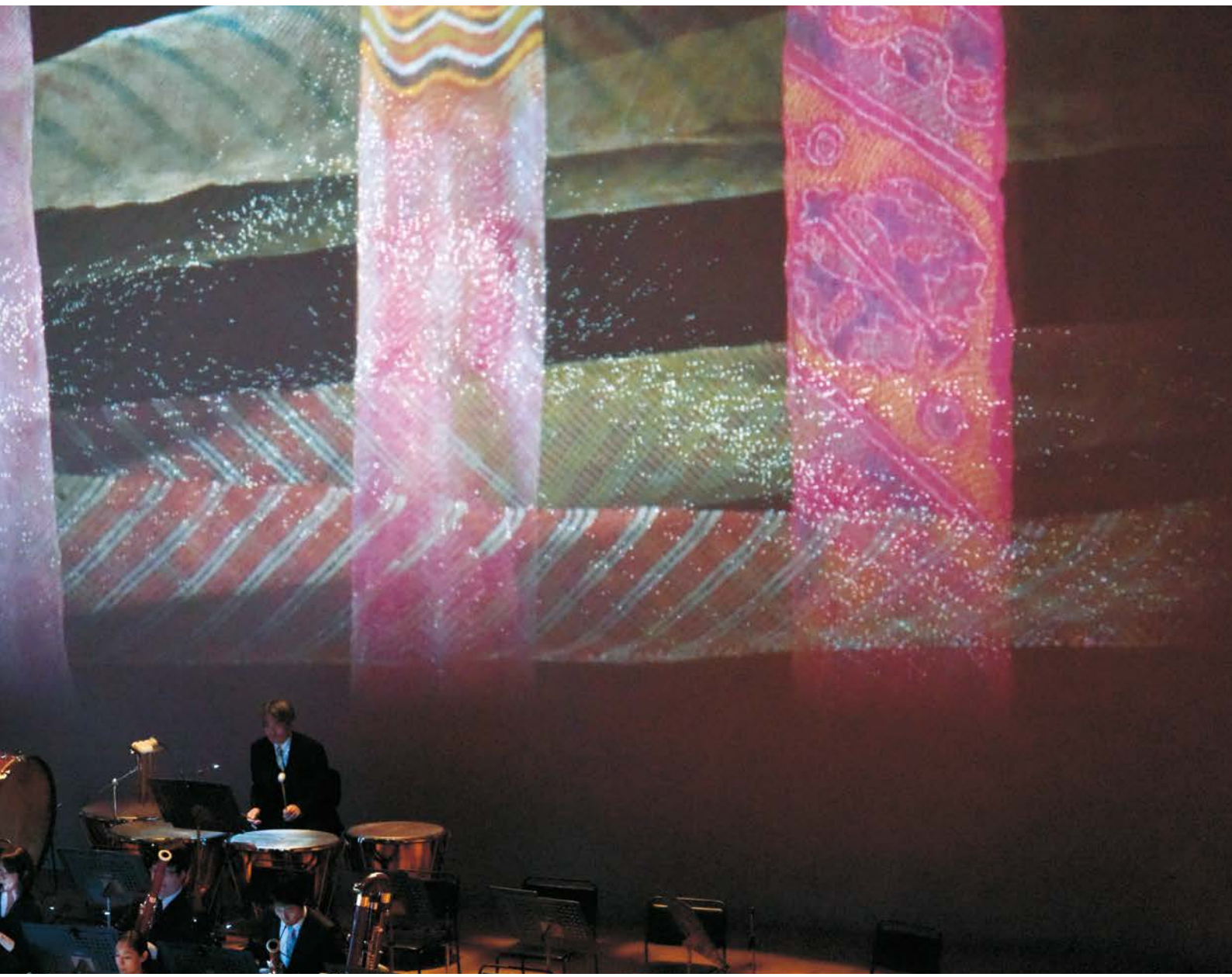
また、いろいろな国の人たちの表現に接すると、どちらの技術が上か、などといったことでなく、それぞれの文化にそれぞれの面白さがあることがわかります。そうした互いの文化、互いに生きている意義を認め合うことは、とても大切だと思います。エム ナマエさんも、「この世界には技術を超えるものがある。そしてそのことが、人々の心に本物の感動を引き起こすのである」と書かれています。

「障がいとアーツ」ではさまざまな人たちや表現との出会いがあります。そして感動のうちに多くのことを学ぶことができるのです。第三回から行われている障がい者による能のワークショップでは、聴覚障がい者に仕舞を舞ってもらったり、視覚障がい者に謡をうたってもらったりしています。耳の聞こえない人がどのようにリズムをとって舞うのか、こちらも手探りでしたが、振動や空気の動きでしっかりリズムがわかり、健常者よりもずっと優れた感覚をもっていることを学びました。聞こえないからといって、音楽がわからない、味わえないわけではないことを知ることができたのです。失われたものに対して、ほかの感覚がとても優れている。これは障がいというよりは、ひとつの立派な才能だろうと思います。

学生たちが今、経験しなければならないのは、このような作品や人間、生活との出会いではないでしょうか。授業でイベントをやるときなど、実は活動している私たちが一番心を揺さぶられている。一緒に作品をつくり上げながら、毎回のように胸を突かれるような思いをします。

こうして、「障がい者に学ぶアーツ」も、私たちの大切なモットーとなっています。学生たちの絵も音楽も、技術的には世界的なレヴェルのものがあります。これに加えて、感動する心と、人を理解する力を得たら、もっと素晴らしい表現ができるのではないか。「障がいとアーツ」というプロジェクトが、そうしたことの一助になればとも思うのです。

（右ページ）右:奏楽堂の客席には、障がい者によるたくさんの作品が飾られた　左:「能の心〜障がいを超えて」で、特別支援学校の教師と藝大の学生とともに「猩々」を謡う視覚障がい者　（左ページ）右：「めかくしおえかき」に参加した子どもたちと描いた絵を披露するエム ナマエさん　左：アイマスクをしておえかきに挑戦する子どもたち



アジアの人たちと手を組んで

実は、私がこのプロジェクトを始めたのは、中国でダウン症の画家に出会ったことがきっかけでした。彼は羅忠鎔（ロッオンロン）という、現在九〇歳になる中国の著名な作曲家の息子さんで、羅錚（ロチェン）といいますが、とても素晴らしい絵を描く天才です。誰にも習ったことはなく、自分で絵を描き始めたのです。

二〇〇〇年に「アジア音楽週間2000 in 横浜」という、アジアの作曲家が一〇〇人ほど集まった音楽祭が開催されました。その実行委員長だった私は、羅錚とその家族を呼んで展覧会を開き、また演奏会ではドビュッシーの《海》を聴いて、この曲を描いた彼の作品を披露したのです。この音楽祭は大成功でした。

その後二〇一一年に、彼から日本に来たいという希望があり、そこで「障がいとアーツ」の第一回を計画して羅錚さんに登場してもらったのです。このときも横浜と同じプログラムを組み込み、会場の皆さんから感嘆の声があがりました。

「障がいとアーツ」では、これまで中国、韓国、ミャンマー、ベトナムと、隣の国々であるアジアの人たちと交流を深めてきました。今年はカンボジアの人たちを呼びたいと計画して、リサーチを進めています。

中国の羅錚さんに続いて、第二回には韓国から李相宰（イサンジェ）という視覚障がいのクラリネット奏者の演奏と、ダウン症や自閉症、身体障がいの人たちによる伝統打楽器アンサンブル「タムティ」によるサムルノリも披露されました。

第三回では、ミャンマーから伝統音楽の演奏者たち、第四回には、ベトナムから身体障がいのデザイナー、チョン・バン・クィさんや伝統楽器ダンバウ奏者のグェン・タン・トゥンさん、韓国のオーケストラHEARTS of VISION CHAMBER ORCHESTRAに来ていただきました。

このオーケストラは李相宰さんが率いる、韓国の視覚障がい者と健常者合同による、世界で唯一の室内オーケストラです。譜面台もなければ指揮者もいません。互いの音や呼吸を感じ取って合わせ、素晴らしい演奏を聞かせてくれます。コンサート最後のアンコールでは場内の照明をすべて落として、真っ暗な中で演奏を続けてもらいました。これには皆さん感動して涙を流していました。

「障がいとアーツ」に参加してくださった多くの方々から、感動と賛同の声が届いています。障がい児を持った韓国のお母さんは、「こんなに感動したことはありません。この子が生まれてよかった。この子が人生最大の幸せをもってきてくれた」という言葉を寄せてくれました。

上：「聞こえる色〜音を色に変えて」では、藝大フィルハーモニアの演奏に連動して、藝大アートイノベーションセンターによる色彩豊かな映像が投影された　右下：「みんなで家をつくろう！」に参加し、絵を描くベトナムのデザイナー、チョン・バン・クィさん　中下：韓国のオーケストラ HEARTS of VISION CHAMBER ORCHESTRA。右手前クラリネットを吹くのがリーダーの李相宰さん　左下：ダウン症の書家、金澤翔子さんが「藝」の字を力強く揮毫する

二〇二〇年をめざして

私たちは、藝大という、創作者や研究者を養成する場所から出発していますから、芸術、表現を中心に活動を広め、すべての人が集まることのできる機会、皆さんに感動してもらい、いろいろなことを考える機会をつくりたいと思っています。

現在、「障がいとアーツ」の取り組みに対する理解と賛同、協力の輪が広がってきています。二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピック開催のときには、欧米の国々も含めた大きなネットワークができるといいなと希望をもっています。さまざまなジャンルや人たちが参加して渦を巻くような、大きな動きにしていきたいのです。

羅錚さんが松下副学長作曲の作品を聴いて描いた絵を前に、左から松下副学長、羅錚さん、父親の羅忠鎔さん

障がい者をはじめとする「アール・ブリュット」（生の芸術）の作品展を二〇二〇年に都美術館などで開きたいと、舛添都知事が議会で述べています。藝大がこうした芸術活動の中心になれたら素晴らしい。そのころには藝大にも障がいを持つ人たちが普通に入学してきて、アーティストに育っていく、といった状況になってほしい。障がい者の表現が特別なことではなく、当たり前のことになってほしいと思います。

この「障がいとアーツ」のプロジェクトを深く理解していただいている宮田亮平学長も、「〈生きている〉ということを大切にして、〈共に生きる〉社会をつくっていきたい、多くの皆さんのご協力をいただいて、一緒に新しい歴史をつくっていきたい」と述べておられます。

「障がいとアーツ」は、今年も十二月五日（土）・六日（日）に開かれます。ぜひ皆さんで参加していただき、素晴らしい感動と体験になりますよう、願っております。

上：ゴール・ボールの選手でロンドン・パラリンピックの金メダリスト欠端瑛子さんのトーク。お話を聞くのは松下副学長
下：聴覚障がいを持つ人たちがステージに上がって、楽器の音を身体で感じて楽しむ「見える音〜オーケストラの中に入ろう！」

美術学部の特別支援学校への支援活動

上：東京都立八王子盲学校（中等部）への支援で、電動ロクロで制作する生徒に手を添える本校の学生
下：2015 年 2 月開催の東京都公立学校美術展覧会で展示された芸術教育推進事業の作品

二〇〇七～二〇〇八年に文部科学省・厚生労働省によって開かれた「障害者アート推進のための懇談会」のとりまとめを受け、二〇〇八年度～二〇〇九年度にかけて実施された、文部科学省の東京都教育委員会への委嘱事業「東京都における発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業」における「芸術系大学生派遣による特別支援学校芸術教育推進事業」に対して美術学部は協力し、美術教育研究室の若手教員や大学院生・卒業生等を中心に、東京都立特別支援学校の美術の授業や部活動で生徒の制作活動を支援してきました。

その後、国の事業は実施形態の変更により継続されませんでしたが、二〇一一年度に東京都の単独事業「都立特別支援学校における芸術教育の推進充実事業」が立ち上げられ、以後、美術教育研究室は実施に協力、東京都教育委員会により指定された特別支援学校三校において、美術学部の若手教員や大学院生等が美術の専門性を活かした制作支援にあたっています。国の事業から継続して六年目となる本年度は、知的障害の生徒に加え、視覚障害、聴覚障害の生徒も対象となり、各学校の美術科教員と協力しながら制作支援活動を行ってきました。

二〇一三年度には、文化庁・厚生労働省による「障害者の芸術活動への支援を推進するための懇談会」で中間とりまとめが示されたのを受け、美術学部は金沢美術工芸大学と連携して、「平成二六年度文化庁　次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」において「障害者の芸術活動を支援する新進芸術家育成事業とその育成を芸術系大学において行う基盤構築のための調査事業」に取り組み、障害者の美術活動を支援できる若手芸術家の育成と、その育成を芸術系大学が行っていくための調査を実施しました。

同志対談／第22回

教員は語る

Professor Interview

portrait photos by horiguchi hiroaki

美術学部デザイン科機能・演出研究室　教授
尾登誠一

美術学部絵画科油画　教授
坂口寛敏

学部の四年間、同じ山岳部で厳しい訓練と楽しい山の時間とを、共に過ごした尾登教授と坂口教授――お二人とも、山での得がたい経験が、創造活動に深くかかわっていると吐露する。

山岳部の厳しい訓練

坂口　尾登先生も僕も、一九六九年に入学してすぐ山岳部に入って、山にも何回か一緒に登りましたね。

尾登　剣岳で迷ってしまいました。

坂口　そう、私たちが新人のときの剣岳夏山合宿でした。四年生たちがリーダーで大勢の一年生新人を引き連れ、午前は三ノ窓の雪渓で雪上訓練を行い、午後は各パーティーに分かれて、それぞれ違ったルートからベースキャンプに帰ることになっていたんですね。午後になると土砂降りの雷雨になった。ちょっとした切れ間ができたので、私たちのリーダーだった佐藤一郎さんが「行くぜー」と言って、私たちのグループだけ歩きはじめたんですが、霧も出て道に迷ってしまい、夕方近くまでさまよってから下りてきました。急峻な雪渓の下方で滝の音がしていて、足を滑らすともうだめ、といった相当危ない状態でしたね。その後佐藤さんと私は油画の教員になり、佐藤さんが「行くぜー」と言ったら、ちょっと待てよ、と慎重になるのが私の役目になりました（笑）。

尾登　救援隊というか、暗い中、仲間が迎えに来ましたよね。

坂口　その前五～六月に三ツ峠の岩山で合宿したり。

尾登　富士山での雪上訓練、滑落停止のトレーニングも一緒だった。

坂口　冬山で必要な技術を習得するため、十一月から十二月にかけて富士山の吉田大沢で合宿があって、これがまた厳しい。基本的な技術は一年半ほどやりましたね。

尾登　それから当時、音楽学部キャンパスの奥のほうにレンガ棟の部室があって、その外壁の周りを岩壁トラバースに見立てて、登攀の基本動作である三点確保でグルグル這っていた。

坂口　レンガの壁には、手の指が入るぐらいの穴を先輩たちが掘っ

てある。で、壁の下にある石組みに足を置いて、壁の穴に手をかけてカニのように横這いで何周も回るんです。

尾登　ザックの中にレンガを詰めて、階段を上ったり下りたりの体力トレーニングもありました。

坂口　不忍池のほうまで一周マラソンして、途中の神社の階段をダッと駆け上がったり、体力づくりですね。授業が終わると部室に集まってはこうした訓練をしました。僕はロッククライミングが好きでしたから、ひたすらカニで（笑）。

恐ろしい山の事故

尾登　富士山の五合目にテントを張ったときはすごかった。強風にあおられて鉄の大鍋がボーンと吹き飛ばされるんですよ。登っていても突風で体がフワーッと浮く。午後になると雪がシャーベット状になってアイゼンも効かない。そんな折、プロのスキーヤーがアイゼンワークに失敗して頂上から滑落したことがあって、藝大の山岳部に協力要請がありました。冬場の富士山は本当に怖いですよ。

坂口　あれは三年生ぐらいだったかしらね。富士吉田から登って五合目の佐藤小屋のところが森林限界といって、そこへ出るとすごい風なんです。風が通り過ぎるまで待って上がってみると、もういくつかテントごと飛ばされていて、相当な事故だったですね。

尾登　集中豪雨も怖いです。テントは水場に近いところに張るでしょう。ところが山の雨はいわゆる鉄砲水となって、あっという間に水かさが増える。

坂口　僕らも経験していますね。黒部川から唐松岳のルートで中洲にテント張っていて寝ていると、ゴロンゴロンと音がするので目を覚ますとすごい濁流になっていて、こっちに水がやって来る。危うく流れの弱いところから向こう岸に飛びのいて、助かりました。

尾登　山ではいろいろな状況判断が必要ですね。気象図による天候把握は原則ですが、やはり現場での勘が必要になってくる。山で経験を積むということは、勘を研ぎ澄ますことだと思うんです。

坂口　僕がリーダーをした経験でいうと、事例の勉強も大事ですね。どういうルートをとったときに雪崩に遭っているか、どんな状況で土砂災害に遭っているか。ほかの山岳会などの遭難報告書を見ると、とても勉強になります。

時代に反抗して山岳部へ

尾登　僕の高校時代は、美術部長でありながらスポーツが好きで、山も難しいものよりは沢登りなどをよくやっていました。

坂口　僕も福岡の出身なのでそんなに高い山に登ったことはなかった。ただ、藝大に入って自由に芸術をやる前に、何か生死にかかわる体験をしないと何もわからないんじゃないか、っていう思いがあったんです。当時の学生運動なども半分足を突っ込んでいたりしたので、いきなり芸術をやるなんてとんでもないと。体を鍛えて命がけで何かやらないと、と思って厳しい山岳部に入ったわけです。

尾登　僕らが入学した七〇年代は学生運動がある程度終息してきて、「三無主義」という言葉が流行りました。無気力、無関心、無責任の世代といわれます。逆にその反動で、ノンポリでありながらも、ぬるま湯に浸かるのではなく、ちょっと危険を冒して何か試したいという気持ちはあったようです。当時の大学山岳部は人数が多くて、例えば剣岳の夏山合宿ではいろいろな大学がベースキャンプを張るんですが、そこでは野営する各大学がエール交換したり、もう都会と同じようなテント村だった。

　藝大の山岳部はその風体からして一目でわかりましたね。流行りのきれいな山支度じゃなくて、例えばおやじの股引きをちょん切って帽子にするとか、なんか工夫するわけですよね（笑）。

坂口　自前でつくってきちゃう。大学にはそれぞれカラーがありました。東京農大などはサバイバル的に用意周到。京大山岳部は、装備なんかどうでもやってやるぞ、みたいな感じ。藝大の女子も個性的で目立っていました。

尾登　藝大の山岳部は、山を征服するということに増して、自然と一体となるというところがありますよね。

坂口　そう。登っている途中も、苦しいんだけど、景色とかちらっちらっと見ながらね。それでテント場に着いてテントで食事したりする、そういうときの楽しく新鮮な感じが、もう何にも変えられない体験でした。それが創作するうえでの一つの土台にもなっている。

尾登　藝大山岳部では先輩・後輩という縦関係はほかよりもゆるくて、ほかの大学に見られたヒエラルキーの中でのしごきもなかった。それも特色でしょうね。もちろん、遭難の経験からしっかりした組織

体制はあって、それをきっちり守りながらいろいろな科のいろいろな学生が訓練している。厳しいという感じよりも、とても心地よかったですね。

黒沢ヒュッテと山岳ゼミ

坂口　長野県大町市に黒沢ヒュッテが建てられたのは一九六〇年ですが、まもなく小屋のあたりが鹿島槍スキー場になってリフトもできた。スキーには抜群の環境なので、山岳部員だけじゃなく一般にも開放されました。

尾登　マットの上で雑魚寝だし、冬は石油暖房でしたが、山小屋は相当冷える。お酒で体を温め、会話が弾むことも山小屋での楽しみ方かも知れません。

坂口　自炊ですから、食料を全部担いで持っていきます。風呂はないけど、きれいでおいしい水が引いてある。

尾登　黒沢ヒュッテは、山に抱かれ、ゆったりとした時間の中、自然と一体となれる環境と雰囲気がいいですね。デザイン科ID（機能系デザイン）の場合は、研究室の伝統行事で山岳ゼミというのがあって、一九六三年の一回目から現在までつづいています。上野の杜でやるゼミと違って、山にこもる逃げ場のないゼミです。テーマは例えば、人工的行為であるデザインが自然とどう向き合えばよいのか、あるいはデザインの社会に向けたスタンスとか、自然観をベースに、原理的な問題をじっくりと議論しあったことが、とても印象に残ります。

坂口　僕は油画でしたが、研究室の先生が山の風景が大好きな野見山暁治先生でしたので、何度も山小屋にお連れしました。先生のスケッチに同行したり、スキーの手ほどきも行いましたが、高いところに行くにしたがって師弟の立場が逆転することを、先生はおもしろがられていました。登山とは別にいろいろな科や学外の方がオールシーズンで利用していましたね。

尾登　山岳ゼミは例年十月や十一月、紅葉の美しい時期に行われます。また夜は満天の星の観照も格別です。漆黒の夜空の星屑の多さに学生たちはみな感激するんです。小屋の外でシュラフにもぐりこみ、寒いのにずーっと星を見ている学生もいました。後で聞くと、心の洗濯ですといっていました。

坂口　周囲にはキノコ類や山菜もけっこう豊富だし、イワナもいるんです。それをいろいろ採ってきて食べる。これがまたおいしい。

学生時代に鹿島槍ヶ岳山頂にて。
後列右から坂口教授、一人おいて尾登教授。1969 年

山登りと創造のいとなみ

坂口　卒業してから、尾登先生はイタリア、僕はドイツに勉強に行ったんです。僕は、黒沢ヒュッテに一番近い鹿島槍ヶ岳によく登ったのですが、自分の体力と青春をかけて登った日本の山のスケールと、憧れのヨーロッパ・アルプスのスケールとは、いったいどこが違うのだろうと、とても興味がありました。実際に、見た目やスケール感を体験してみると、結局、日本の山も相当いいスケール感だなというのがわかりました。

　というのも、実は登山と芸術の世界とがオーバーラップしてくるんですよ。西洋画はヨーロッパが本山ですから、自分が日本で勉強して身につけたものが偽物なのか本物なのか、現地で実際に確認してみたかったこともあります。結果は山と同じで、日本であろうと外国であろうと、そこに自分が介在すれば、変わりがないことがわかりました。

尾登　イタリア遊学で印象的だったのは、イタリア人はとにかく主体的デザインにこだわるということです。自己の中で自由にテーマを探る（ricercare ＝リチェルカーレ）。「これ以上のモノが自分にできればデザインするが、自信がなければその必要はない。いまあるよいモノを使えばいいのだから」という姿勢です。イタリアのデザインのクォリティは、デザイナー個々が持つ、モノづくりの理念をよりどころとしています。ところが、三年ぐらい住むと、「イタリアも日本も変わらないな」という心境に行き着く。でも、違い

尾登誠一教授

はあって、それは条件に振り回されず自分でテーマを設定できる「心の余裕」だと気づくわけです。違いは自己と他者の関係性に対する意識の違いであり、個として大きく現象を観るということにおいて差はない。そういう意味でも自然観は重要だと考えています。

また外国に在って気づくことは、日本人の繊細さ。これは日本人独特の美意識で、恐らく自然の中の季節の移ろいを感じるところからきているような気がします。例えば落葉の瞬間は、温度とか風のぐあいとかを植物がセンサリングしてハラッと落ちる――そうしたことへの驚きです。自然にはそういう瞬間美がたくさんあって、山小屋でそうした自然(大いなる他者)への気づきを経験したことは、亡くなられた恩師小池岩太郎先生の「デザインは愛である」という言葉にすんなりつながり、行動の基点になっているように思うんです。

生物が自然の中で生きる感覚。三・一一以降、僕はこれを「生物生息勘」としています。例えば「ここに発電所を造っていいの?」というのも、この「勘」だと思うんです。デザインの基本はこの生物生息勘がベースにあって、命を守るとか、生物が生きるための条件を勘で察することが求められる。人間を自然の一部としない発想には思い上がりがあり、時としてしっぺ返しを受ける。自然はそんなに甘くない。とてもやさしく美しいが、人間を一瞬で抹殺する厳しさをも持っている。僕は山岳部に入って、こうした自然が秘めているさまざまな力や、その関係性を知り、それがデザイン観に連なっているような気がしています。

坂口　山は登った高さだけ下りてこなきゃいけない。それで初めて登山になるのです。いつも自分が出発した地点、ゼロ次元に戻ってこないとなりません。それで初めて、人間は物が見えてくるのですね。山登りはその最たる修行の場ともいえます。登ってくることで初めて、美しさと苦しさを経験し、自然の恐ろしさに敬意を表せるようになる。自然の中での人間の営みが生み出した感性、というものが日本の文化の特徴で、それは日本の芸術や創造的な営みと一体となっていると思います。

坂口寛敏教授

尾登先生のおっしゃる季節の移ろいも、毎年四シーズンがめぐってゼロに戻っていくので、どの時期も平等に鮮やかになる。ここが日本の素晴らしいところです。あえて「自分」を主張しなくても自然と寄り添っていれば、大きな変化にその都度出会える。これはとても豊かな恵みなんじゃないでしょうか。

一方、西洋の文化は、自己の確立とその解放といえますから、日本の持っているものと西洋的な文脈をいかに統合しながら国際的なステージで表現するか――これが僕らの命題ですね。

尾登　いずれにしても、僕らが山に登った経験は、アートやデザインというものに、深いところで影響を与えているようですね。藝大生たちよ、もっと山小屋を利用してください。

坂口　科を超えて素晴らしい出会いを生むクラブ活動が、今後も学園生活を豊かにしつつ盛んになることを願っています。

2002年、黒沢ヒュッテで開かれた山岳ゼミの面々。前列右の黒い帽子が尾登教授

尾登誠一（おのぼり・せいいち）
美術学部デザイン科機能・演出研究室教授

1948年埼玉県生まれ。73年東京藝術大学美術学部工芸科インダストリアル・デザイン専攻卒業。（伊）ジョルジオ・デクロス デザインオフィス、（株）デザインオフィスBACS勤務。85年「鳥の声を聴くための道具」でデザインフォーラム銅賞、91年（株）デザインスタジオスパイラル開設。Gマーク審査員、日本デザイン学会副会長、日本色彩学会理事を歴任。著書に『色彩楽のすすめ』（岩波アクティブ新書）。2002年より現職。

坂口寛敏（さかぐち・ひろとし）
美術学部絵画科油画教授

1949年福岡県生まれ。73年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。75年同大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻修了。76年ドイツ・ミュンヘンに渡り、83年ミュンヘン美術アカデミー絵画科卒業。2007年個展「パスカルの庭・都市軸・時間軸」。13年表参道画廊にて「Field of Silence」。1973年大橋賞。99年現代日本彫刻展で東京国立近代美術館賞。2003年より現職。

Visiting the Laboratory

研究室探訪

Vol.9

日本画 大学院第三研究室

Nihonga Studio No.3

藝大の教員たちが、
日々の研究やレッスンに勤しむ
「研究室」のなかは
どうなっているのだろう？
なかなか見る機会のない部屋を
潜入ルポする。

精確きわまりない模写

天井が高く、北側の大きな窓から光をいっぱいに取り入れた、制作アトリエのような研究室では、四人の学生たちが机に向かって細かく絵筆を動かし、二人の留学生が大作の制作に余念がない。

ここは日本画大学院第三研究室。現在、手塚雄二教授、吉村誠司准教授、廣瀬貴洋講師を中心に、松岡歩、上野高、繭山桃子の教育研究助手という体制で、修士一年六人、二年四人、博士一〜三年が一人ずつと、計一三人が学んでいる。修士課程では、古典作品の模写を主軸にして同時に制作も進めており、博士課程では制作が中心となる。学生たちは、全員美術学部で日本画を専攻してきた学生ばかり。訪問した教室は修士一年の六人のクラスだ。

この研究室で行う模写は現状模写といって、絵柄だけでなく、オリジナルの紙のシワや瑕、全体の濃淡なども描き写すという、たいへん精度の高いもの。現在手がけているのは出光美術館所蔵の国宝「伴大納言絵巻」。平安時代の人びとの様子を生き生きと描いた傑作である。

現状模写は、まず原寸大の写真に薄美濃紙をあてて上げ写しを行う。上げ写しとは、ちょうどアニメのセル画をつくるときのように、あてた和紙を何回も繰り返しめくって、寸分たがわずに転写すること。ごく細い筆と油煙墨を使う集中力を要する丹念な作業で、失敗が許されない一番重要な工程だ。たとえば、ごく細かい線をきれいに描き写すには、筆で線を引くのではなく、点を打って線の形を出すというと、最大で五百円硬貨一枚程度の範囲だから、辛抱のいる仕事だ。一枚を写し取るのに半年はかかるそうだ。

上げ写しが終わると、強度を保つため本紙と同じ薄美濃紙で裏打ちし、パネルに張り込んで彩色作業に入る。彩色には岩絵具や水干（すいひ）絵具、染料など、実物に使われていたと推定される絵の具を慎重に吟味して使用する。彩色作業では、所蔵先の厚意で二年間で計四回にわたって国宝の現物と比較して色調を合わせるという、めったに得られない贅沢で貴重な体験もできる。国宝を前にした作業は、ものすごく緊張するという。

こうして二年間かけてようやく一枚が完成する。「学生たちが仕上げたものは、原画と並べて展示しても、どちらが本物かわからないほどパーフェクトなものです。ここまでできるのは、この研究室だけです」と手塚教授は胸を張る。

自分で方法を見つけ出す

このようにたいへん高度なテクニックを必要とする模写だが、そのノウハウを先生がいちいち学生に教えるという方法はとらない。「何から何まで教えてしまったら、それは学生の勉強にはなりません。自分たちが考え、間違ってもいいからやってみることが大切なのです」。

正解は唯ひとつ——原画とまったく同じものにする、である。そのための方法はひとつに限らずいくつあってもよい。そこで学生たちは、どうしたら望む結果が得られるか、自分で一所懸命考えながら作業に臨む。

「技の伝達はもちろんですが、それだけでなく〈考える力〉を身につけてほしい。学生の自発性を最も大切にしています。ですから、一番ものを教えない学科ですね」。これは学部のときからの一貫した教育方針でもある。

もちろん、わからないことや迷うことがあったら、先生や助手の人に相談するわけだが、もうひとつ大きな援軍がある。それは先輩たちが残してくれた何冊ものノートだ。

このノートには、模写の技術について先生や先輩の助手たちから受けた講義内容をはじめ、実際にどこをどのような方法で模写したか、また、工夫や編み出した方法などが、ときには写真入りで詳細に記されている。これを参照すると、問題解決のヒントが得られたり、先輩たちが苦労した跡もわかり、とても勉強になるわけだ。

現在模写の作業を続けている学生たちも、自分で試行錯誤したり、新たな方法を編み出したりした、その工程や結果をノートに書き込んで後輩に残していく。この研究室の歴史は長いので、こうしたノートによるノウハウの蓄積がたくさんあり、学ぶ者にとってはまさに宝の山だ。ノートは、模写作業の成果報告書としてまとめられ、原画の協力をいただいた美術館に提出される。

模写によって美の根本をつかむ

では、なぜそこまで精細な模写をするのだろうか。

photos by horiguchi hiroaki

上げ写しが終わり、パネルに張り
込んで彩色作業にとりかかる

1：研究室で模写に集中する。この姿勢がつづくので腰が痛くなる　2：彩色に使う岩絵具　3：筆は各種のものを使うが、自分でカスタマイズしたものもある　4：模写の進行を見守り、適切なアドバイスをする手塚教授（手前）と吉村准教授（奥）

「一年、二年をかけて模写をやると、まず、古典作品がどのようにして描かれているか、わかるようになります。作品を分析し、読む力ができてきます」と、手塚教授は模写の意味を説いてくれた。

「理論的な分析ではなく、日本の文化のうちで最も美しいものを模写することによって、自分の心とからだの中に、美しい形、美しい色が入ってくる。それを基準に、ものごとを見たり考えたりできるようになるのです。模写によって作者と自分を重ね、追体験することにより、自分はこの作品を読むことができた、理解することができた、という自信も生まれてきます」。これは何物にも換えがたい財産となるに違いない。

「日本の美の根本がわかる授業といってよいでしょう。〈学問〉ではなくて、自分の手や目から入ってくる感性、それを育てたいのです。そうすると、制作するときにも、その経験が生きてくる。つまり、模写を通じて、絵描きになるための修練をしているわけですね」。模写の目的は、あくまでも日本画を描くための勉強なのだ、と手塚教授は強調された。

吉村誠司准教授も「日本画の画材で、新しいものをつくっていくのがこの研究室のスタンスです。そのため、まずはきちんと日本画の基礎を身につけた人間を育てたい。発展や飛躍はそのあとでくるべきものですね。真のオリジナルをつくり出すために、古典を勉強する。いわば創作の芯となる学科です」と研究室の狙いを語る。

ここで学ぶ学生たちも意欲的だ。伝統的な日本画の運筆の美しさに感動したのがきっかけで日本画を専攻した中村桃子さん（修士一年）は、「学部で現代の日本画に触れ、基礎的な材料論を学んだことで、歴史や技術に興味が湧きました。今ならもっと深く古典を知

5, 6：模写制作の過程や方法が詳細に記録されたノート（写真６は第三研究室提供）　7, 8：完成した模写「伴大納言絵巻」の一部。原画と区別がつかないほど精巧　9, 10：制作にとりかかる中国（男性）とイラン（女性）の留学生たち

ることができるのではないか」と考えてこの研究室を志望した。

曳地聡美さん（修士一年）も、「模写を勉強することで、技術的なことも含め自分の制作の糧になると考えてここに入りました」と語り、「制限された時間の中で、どこまでやり遂げられるか、自分との戦いです」と、模写の厳しさを実感している。

平安の三大絵巻完成が目標

藝大の模写の歴史は古く、芸術資料館（現在の大学美術館）には東京美術学校時代からの模写作品が数多く収蔵され、創作研究にとって古典作品の模写が重要なものとされてきた。二〇〇三年、平山郁夫教授によって「敦煌莫高窟壁画」の模写が完成した後、手塚教授と吉村准教授の指導のもと、国宝「源氏物語絵巻」の現状模写が始まった。七年間かけて計五六面を、協力美術館への寄贈と藝大収蔵のため各場面二点ずつ完成させている。

現在進めている国宝「伴大納言絵巻」の模写が終わる三年後には、朝護孫子（ちょうごそんし）寺蔵の国宝「信貴山縁起絵巻」にかかる計画。それが一〇年近くかけて完成すると、平安の三大絵巻が藝大にそろうことになる。

第三研究室の卒業生たちは、一部が画家として立つほかに、ほとんどが絵の関係の仕事についている。職業の幅は意外に広く、精細画のイラストレーターになったり、大河ドラマの美術や時代考証を担当したり、印刷局で紙幣の文様を描いたり、変わった例ではゲームソフトの図像制作もある。

この研究室は、日本画の真髄とその技芸をしっかりと学び、絵画の粋を身につけることによって、さまざまな美を生み出す仕事で活躍する人材を輩出する学科なのである。

学生インタビュー

Student Interview

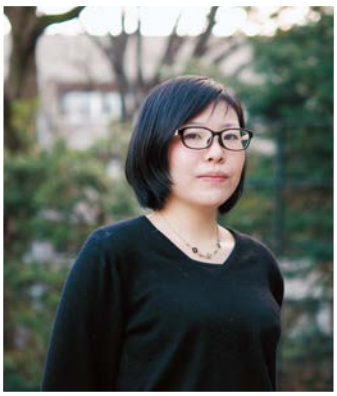
Vol.1

藝大の在校生は、公募展やコンクールなどで栄誉ある賞を受賞し、各分野の最前線で活躍している。若き才能が日々の努力と今後への意欲を語る

美術 Fine Arts

杉山由香

大学院美術研究科
建築専攻修士一年



1988年栃木県生まれ。東京電機大学卒業後、大学院美術研究科建築専攻に入学。2010年「サスティナブルアイデアコンペ」最優秀賞、サスティナブルデザイン国際会議にて作品発表。

学部（東京電機大学）の卒業制作では、ワーキンググループのための福祉施設の設計をして、二〇一三年のJIA（日本建築家協会）全国学生卒業設計コンクールで金賞をいただきました。実際に山谷のドヤ街を調べてみると、いろいろな理由で仕事につけず、お金のない人たちが野宿したり、ひとりで悩んでいる状況がある。どうしたらよいかと研究を進めると同時に、自分の思いを発泡スチロールに落としてモデルをつくっていきました。暮らす人たちが、辛い気持ちを癒せる場所でありながら、単なる建造物ではなく、隠されて目に見えない日本の貧困を世の中に知らせるような空間にもしたかったのです。

私が修士の建築専攻に入った年の二〇一四年、ポラスグループが主催する学生・建築デザインコンペで最優秀賞となった「じじばばシェアハウス」

音楽 Music

岡本誠司

音楽学部器楽科
二年

1994年千葉県生まれ。3歳よりヴァイオリンを始め、音楽学部附属音楽高校卒業後、音楽学部器楽科入学。中澤きみ子、ジェラール・プーレ、澤和樹各氏に師事。

二〇一四年に、ドイツ、ライプツィヒのバッハ国際コンクールで第一位となることができました。自然な音楽性と、あるスタイルに偏らない柔軟でバランスのよい表現力が評価されたのですが、うれしかったのは、現地の聴衆の方々がとても暖かい拍手で応えてくれ、聴衆賞もいただいたことです。

三歳からスズキ・メソードでヴァイオリンを始めたのですが、幼稚園児にとっては、ほかに楽しいことがいっぱいで、毎日練習するのはやっぱりつらい（笑）。そこを母親や先生がうまくリードしてくれて。その後は中澤きみ子先生に習いました。中澤先生からは、楽譜の向こう側――作曲家は何を伝えたいのか、どういう思いを込めてこの曲をつくったか、そうしたところに目を向けるよう教えられ、今の自分をつくるのに大きな力となっていると思います。

映像 Film & New Media

曽根光揮

大学院映像研究科
メディア映像専攻修士二年

1990年静岡県生まれ。静岡文化芸術大学デザイン学部卒業後、大学院映像研究科メディア映像専攻に入学。2014年『写場』が文化庁メディア芸術祭で審査委員会推薦作品。

コンピュータ・グラフィクス（CG）を始めたのはけっこう早くて、中学時代です。ピクサー製作の『トイ・ストーリー』のようなCGだけによるアニメーションの映像が、手元のパソコンで本当につくれてしまう、そのことに衝撃を受けました。

中学高校時代はCG制作に明け暮れ、静岡文化芸術大学でもCG制作をつづけたのですが、そのうちCGとはいったい何なのか、CGでできる表現とは何か、と概念的でメタなほうに興味が湧いてきました。

CGの精度はどんどん高くなり、実写と紛うほどのリアリティを獲得しています。それに、映像の加工が可能となった現在では、実写とCGとは本質的には区別ができない。しかし、実写にはやはりそれでしか出せないものがあります。また、例えば劇映画を見ているときは、フィクションとして見る

も、同じように弱い立場の人たちのための集合住宅です。従来の高齢者施設では、お年寄りを閉じ込めてしまうように思ったので、近所の人たちや子どもたちも抵抗なく入っていける、外路との行き来が容易な、生き生きとして明るい空間が必要なのではないかと、提出したプランでした。

将来高齢者が増えることは間違いないし、これから来る社会への不安もある。そうした中で、私のプレゼンテーションを聞いてくれた人たちだけでも、一緒に何か考えてもらえたらいいなと思ったのです。

研究室でのテーマは、新潟の新発田にある長徳寺で子孫のない人たちの合葬墓を立てるプロジェクトですが、修士制作では、やはり困っている人たちのために、なにか役に立つことを考えたい。そういうスペースを計画しようと思っています。

今後も困っている人が救われる建築、社会の構造が見えてくる建築をめざしていくつもりです。人間が生きていくことや死ぬことは、どういうことなのか、また建築が生きるとか死ぬとかは、どういうことなのだろう――そういうことと社会問題とを結びつけて計画を立てられたらいいなと思っています。

「春を待つ橋の下」
敷地は山谷に近い隅田川沿いのスペース。貧しい人たちの屋根である橋を何層にも編みこみ、彼らのいのちを守る建築――セーフティネットをつくる

小さいころからバロック音楽が好きで、不思議とバッハに引き込まれるものがありました。中学生ぐらいから、バロックチェロの鈴木秀美先生のレッスンも受けており、バロックヴァイオリンに夢中だった時期もありました。その経験から、ピリオド奏法（古楽器奏法）の考え方を吸収し発展させて自分の演奏の中に取り込んでいけば、モダン楽器の演奏の幅は広がっていろいろなことができる、と考えるようになったのです。現在も、副科でバロックヴァイオリンの勉強を続けています。

音楽学部附属音楽高校の三年間と藝大に入ってからの二年間は、澤和樹先生に教えていただきました。お人柄や人間としての豊かさ、ヴァイタリティ、そうしたものが音楽、音のひとつひとつに表れている。こういう先生を目標としていきたいと思っています。

バロック音楽のほかにも、実はブラームスが大好きですし、プロコフィエフやショスタコーヴィチなども、噛み応えがありますね。また、室内楽でも弦楽四重奏団を組んで活動しています。今後、編成やレパートリーも広げて、ソロ活動と並行して室内楽でも演奏していきたい。自分の可能性に大きく挑戦してみたいと思います。

バッハ国際コンクール
最終選考では、バッハの無伴奏パルティータ第２番と、ヴァイオリン協奏曲を演奏

ので自分の中に危機感は生じませんが、ニュース映像には信憑性を感じて深刻になったりする。映像の本質としては代替可能なこの二つに、なぜ違いが生じるのか――こうした映像に対する真実性やリテラシーについて、とても興味を持ったのです。

そこで藝大大学院でメディア映像を専攻し、メディアの中のリアリティの問題を追求してみたいと思いました。この大学院では展示形式の作品が特色でもあり、僕の作品もインスタレーションの性格を持つようになりました。それに加えて、これまで経験のなかった実写にもトライしてみた結果が『写場』という作品です。二〇一四年度の文化庁メディア芸術祭アート部門で審査委員会推薦作品となったものです。

『写場』を鑑賞する人は映画を見ていると思っているうちに、突然自分が撮影され、その写真が映像の中で取り出されます。鑑賞者は映像に対する自分の位置が不確かになって落ち着かなくなる。映像におけるリアリティや鑑賞者との関係性に、ある種の揺さぶりをかけるわけです。我々が普段何気なく接している映像経験とは何かという問題を体験として提示する作品を、今後もつくっていきたいと思っています。

『写場』
映画の中でカメラマンが肖像写真を撮っているが、カメラがこちらに向けられると、鑑賞者を撮影してしまい、その写真が画面に出現する

卒業生に聞く

Interview with a Graduate

［第九回］

光はとても強いメディア 光によってさまざまなことを 多くの人たちに伝えたい

石井幹子

一九六二年
美術学部工芸科図案計画専攻卒業

portrait photos by horiguchi hiroaki

プロダクトデザイナーにあこがれて

私は一九五八年、藝大美術学部工芸科の図案計画専攻に入りました。ここではグラフィックデザインとプロダクトデザインを学べ、一年と二年はどちらも同じカリキュラムでしたが、私は三年になってプロダクトデザインを専攻しました。このクラスは一三人ぐらいで、そのうち女性は三人だけでした。

私は高校生のころから、プロダクトデザイナーになりたいと思っていたのです。といいますのは、高校一年ぐらいのとき、国立近代美術館で開かれた「グロピウスとバウハウス」という展覧会を観て、こんな素晴らしい仕事をする人たちがいるのか、と感嘆したのです。もともと、モノをつくったり絵を描くのが好きでしたが、画家や彫刻家になるような才能はないので、デザインという分野が自分に合っているのでは、と思っていたのです。

それに理科も大好きで、学校で工場見学などがありますと、うれしく興味津々でした。小学校で石鹸工場を見学したときもおもしろかったし、中学校のときコップ製作工場でガラスのコップがベルトの上をどんどん流れていくのを見て、わあ、すごいと感動。そこへ「グロピウスとバウハウス」ですから、もうぜったいプロダクトデザイナーになりたいと思ってしまったのです。

バンカラだった藝大

私は小学校からお茶の水女子大の附属で、高校も女子高でしたから、藝大に入ってみると驚きましたねえ。たいへんなバンカラで。

みんな授業なんかあまり出て来ないんです。優秀な人ほど来ない。ところが芸術祭にきちんとした作品を出せば大威張りできる。芸術祭では、皆が作品を出して講評をし合ったりして、学生同士が切磋琢磨するという藝大のよき伝統も、校風として残っていましたね。

先生方も手取り足取り教えるのではなく、学生同士勝手に勉強せよ、といった感じです。それに、油絵、日本画、彫刻、木工、金工、陶芸、リトグラフ、写真など、実技については、実際に制作をしながら一通りのことを学ぶことができ、これはたいへんよかった。

私は実務的なことも覚えたかったので、早いころから渡辺力さんの事務所でアルバイトをさせていただいたのです。そこでは図面の引き方や、模型の作り方など基礎的なことをいろいろ学ぶことができました。

そういえば、陶芸のクラスでは、窯が上野動物園のすぐ近くにあるので、一晩、皆で薪をくべたりして窯を囲んで徹夜するんです。ライオンの鳴き声が聞こえてきて、ワクワクしてね。夜の動物園を身近に感じるのもスリルに満ちて楽しいものでした。こんなふうに、藝大時代は学校の内外で充実した日々を送ることができました。

照明をめざしてフィンランドへ

卒業した一九六二年、渡辺力さんが主宰されていたプロダクトデザインの事務所Qデザイナーズに勤めました。そこでは、家具、醤油ビン、茶碗などの日用品から展覧会のセッティングまで、いろいろなデザインを経験できました。当時は、デザインというものの勃興期で仕事も多く、三年勤めた間に実に多くのものをつくる経験に恵まれました。

このとき、たまたま住宅用の照明器具をデザインする仕事を与えられたんです。その試作品ができて、スイッチを入れてぱっと光が

右：2012 年に開通した東京ゲートブリッジのライトアップ。側面に設置した 886 基の LED により月ごとにメインカラーが変わる。
左：日独交流 150 周年記念イベント「平和の光のメッセージ」（2011 年）。ベルリンのブランデンブルク門を、48 種の言語による「平和」の文字で埋め尽くした。

灯ったとき、私は心がふるえました。形でも色彩でも、すべて光があるからこそ。視覚の世界は光によって初めて成り立つのだ、光って素晴らしい、と感動したのです。

照明デザインをもっと勉強しようと思いはじめたとき、たまたま北欧で発行されたデザイン書に出会いました。給料の半分もする高価な本でしたが、思い切って買いました。そこに私がとても心をひかれた照明器具が紹介されていたのです。それをデザインしたのはフィンランドのリーサ・ヨハンソン・パッペさんという女性でした。

私はパッペさんに英文で手紙を書いて、自分の作品集を同封し、私をアシスタントとして雇ってください、とお願いしたのです。すると、どうぞいらしてくださいという返事が来ました。うれしかったですね。当時一ドルが三六〇円、初任給は一万五〇〇〇円の時代で、国外持ち出しは五〇〇ドルまで。外国で働きながら勉強するしかなかったのです。

一番安いシベリア経由で六日間かけてフィンランドに着きました。街ではどのお店も素晴らしいデザインのものばかり置いてあって、さすがにデザインの北欧だと感激したのをよく覚えています。

仕事自体は、日本に比べると条件もよく、ほんとうにラクでした。職場の皆さんも親切にしてくれ、恵まれた職場でした。パッペ先生はたいへん教育熱心で、パーティでの立ち居振る舞いにいたるまで教えていただいたり、お宅によばれていろいろなお話をうかがったり。パッペ先生は私の恩師であり、フィンランドはいまでも私の第二の故郷となっています。

照明器具のデザインについてもよくわかってきたころ、ドイツの建築照明の設計会社の社長さんに紹介され、その人に誘われて、デュッセルドルフに行きました。そこで実際に目にした建築空間の照明は素晴らしく、たいへん刺激的なものでした。先方からスカウトされたのでパッペ先生にご相談して、ここで働くことにしたのです。

ちょうどドイツも戦後復興期でしたから、仕事はおもしろいほどたくさんあり、教会や劇場ロビーの照明、百貨店の外装照明、ショウルーム、病院、銀行と、いろいろな空間の照明を手がけることができました。

左上：和と洋、古さと新しさが融合した倉敷美観地区のライトアップは、4月～9月の日没から22時までと、10月～3月の日没から21時まで　左下：世界遺産の飛騨白川郷では、毎年、日程を決めて夜間のライトアップをしている。照明時間は、17：30～19：30　右：東京タワーのダイヤモンドヴェールのライトアップ。総ライト数276台で17段の光の階層がそれぞれ7色に輝く。

京都を照らし回る
――ライトアップ事始

日本に戻ってくると、一九六八年に自分の事務所をつくりました。当時、著名な建築家たちが新しい試みをしようとしているときで、彼らと仕事をするチャンスに恵まれ、一九七〇年の大阪万博では夜景を演出することができたりと、仕事は順調に進んでいきました。ところが一九七三年にオイルショックとなり、夜はどんどん照明が消されて、省エネの時代を迎えるわけです。仕事もなくなってきて、どうしたらよいかと思案していました。

幸運なことに、二年後に沖縄の本土復帰を記念して海洋博が開催され、その会場全体の照明を担当するという仕事にめぐり合えたのです。やがてアメリカから大きな仕事が舞い込んで、中近東のビッグプロジェクトに参加し、これを契機に国外での仕事が増えて、海外出張に明け暮れる日々となったのです。

でも、当時まだ日本では照明の文化は貧しいものでした。一九七八年に京都で国際照明学会が開かれるというので、夜、京都タワーに昇って調べてみると、あたりは真っ暗で明るいところはパチンコ屋ばかり（笑）。これではいけないと、そのとき私のとった行動は、

実に藝大の四年間にたいへん負っていると思うのです。まずやりたいことは自分でやるしかないと、ひとりで「京都市景観照明計画」をつくって、いきなり「こんにちは」と、市役所を訪ねてプレゼンしました。係員や課長さんもこれには困ってしまって（笑）。

　では、実際に光を照らしてみればわかってもらえるだろうと、今度は「環境照明研究会」なるものを立ちあげて、電源車や照明器具を借り込み、いちばん目立つ平安神宮や二条城などに、「こちらは環境照明研究会です。景観照明の実験をしたいのです。敷地には入りません、光を当てるだけです」と頼みに行ったのです。平安神宮は、いったん許可してくれたのに、当日ダメと言ってきたりと、いろいろありましたが、とにかくなんとか照明実現にこぎつけました。皆さんたくさん見に集まってきて、新聞社も取材に来ました。

　これに意を強くして、ライトアップ・キャラバンと称し、札幌、仙台、金沢、大阪、広島、熊本……いろいろな街で照らしつづけました。全部手弁当です。そして八年目の一九八六年、横浜市からライトアップ・フェスティバルの依頼があったのです。これは八〇万人という人出となって大成功。照明費用の安さにも驚かれました。これが日本のライトアップ事始となったわけです。

　その後一九八九年に横浜ベイブリッジや東京タワーのライトアップを手がけたことを契機に、ようやく日本でも照明という文化が市民権を得てきました。照明の仕事は億単位の予算のものもあり、公の仕事ですから失敗は許されません。そして「きれいだった」「よかった」と言っていただけるものをつくらなくてはならない。電気代も可能なかぎり少なくして効果を上げるようにし、三・一一以降は太陽光発電も積極的に活用しています。

　今後も地方都市の照明計画や、オリンピックをめざして隅田川にかかる橋のライトアップなど、たくさんのプロジェクトが控えています。

日本の文化を光でアピール

　二〇一一年に日独交流一五〇周年記念で、ブランデンブルク門を舞台にしたイベント「平和の光のメッセージ」を開催し、二〇一四年には日本・スイス国交樹立一五〇周年記念で光のイベントを行うなど、海外に向けて日本から光によるメッセージを送るイベントを積極的に進めています。光は非常に強いメディアなのですね。都市の街頭やオープンスペースでは、何万という人たちが見てくれる。それがきっかけとなって日本に興味や関心を持ってくれたらいいな、と思うのです。

　こうした外国でのイベントは、娘のリーサ明理（あかり）との共同プロデュースです。彼女も藝大の美術学部でお世話になり、卒業後パリのデザイン学校で勉強し、やはり照明デザイナーとなって、現在はパリに事務所を持っています。親子ともども照明デザイナーとしてお役に立てるのは、たいへん幸せなことだと感謝しております。

石井幹子（いしい・もとこ）
一九三八年東京生まれ。照明デザイナー。都市照明から光のパフォーマンスまで幅広く活躍。光文化フォーラム代表として国内外の光文化の継承・発展にも力を注ぐ。主な照明作品に、東京タワー、レインボーブリッジ、白川郷合掌集落、上海ワールドフィナンシャルセンターなど。著書に『LOVE THE LIGHT, LOVE THE LIFE　時空を超える光を創る』（東京新聞出版局）、『光が照らす未来―照明デザインの仕事』（岩波書店）、『光時空』（求龍堂）など。北米照明学会会員。国際照明デザイナー協会特別会員。

歴史を彩る人・作品

――総合芸術アーカイブセンターの研究から

History of Geidai in Art and People

第一回

伊澤修二 東京音楽学校初代校長の胸像をめぐって

橋本久美子

音楽教育に西洋音楽を導入することによって日本の近代化を推進し、アジアの強化を図った東京音楽学校初代校長

伊澤修二（嘉永四－大正六年［一八五一－一九一七］）は信州高遠藩に生まれ、日本の近代教育に多大な功績をのこした開拓者である。師範教育、進化論や教育学等の西洋学説の紹介、音楽教育、体操教育、聾唖教育、国家教育社の結成、学制改革、教科書検定制、台湾教育、吃音矯正、訛音矯正、中国語発音の研究など十指を超える新分野の扉を開いた。師範学科調査のため米国に留学した明治八年（一八七五）からの三年間に唱歌教育も経験して日本の音楽教育の遠大な見取り図を描き、音楽取調掛長と東京音楽学校初代校長をつとめた【＊1】。彼の胸像が東京音楽学校に建立されたのは今から八十五年前のことである【＊2】。

音楽取調掛時代の伊澤は「蝶々」や「蛍（蛍の光）」を含む『小学唱歌集』全三篇の編集に携わった。西洋と日本の音律を比較し「毫モ異ナルコトナシ」【＊3】と主張し、音楽教育への西洋音楽導入を決定的にした。この歯切れ良い主張は、当時訳出された『維氏美学』（Eugène Véron著、中江兆民訳、明治十六－十七年、原書は一八七八年出版）などにおける、欧州楽は黒奴や黄色人種の音楽と「全く相異なる」とする西洋学説に真っ向から異を唱えるものであった。『維氏美学』では、支那の音階が西洋音階より少ない五音なのは黄色人種の耳が半音を聞き分けられないためで、黒奴や黄色人種はモーツァルトやベートーヴェンの極上の音楽には感動せず、粗野な曲調が高揚すると感悦し手舞い足踏みする、それは禽獣が歌曲の調子に感応して舞踏鳴囀するのと同じで動物の至情である等々、白人優位が堂々と掲げられていた。日本人が西洋音楽の技術を修得することは、アジアの強化をも意味した。伊澤は後の台湾教育でも、台湾人は学んでいないだけで能力は日本人と同じで、教育によって融和を図ることができると考えた。

著書には『教育学』（明治十五年）を始め、『学校管理法』『教育応用 生理的心理説略』『視話法』『視話応用 国語発音指南』『視話応用 音韻新論』『吃音矯正の原理及実際』等、訳書にはD・P・ページ著『教授真法』（明治八年）、T・ハクスリー『生種原始論』（明治十二年）、同『進化原論』（明治二十二年）等がある。

「伊澤修二先生」胸像は昭和五年（一九三〇）七月二十六日、当時の乗杉嘉壽校長の発案により創立五〇周年記念の一環として建立された。二年前に着任した乗杉は、初代校長の肖像すらない学校で、朽ち果てた壁と雨漏りの跡に「魂の抜けたルイン（＝廃墟・荒廃）」を見た。伊澤の顕彰は学校に魂を取り戻す行動であった。制作者長谷川義起（明治二十四－昭和四十九年［一八九一－一九七四］）は東京美術学校を卒業した三十八歳の彫刻家で、「偉人傑士の銅像を建つるは一個の学校を建つると同一意義」と請けた。彼の苦心が除幕式の制作報告【＊4】に綴られている。長谷川は伊澤の「特級の教育家」「伝統的範囲を脱し卓抜なる識見」「才気縦横」「鉄をも溶かす熱烈なる態度」を瞑想し、伊澤の特色と人格を広い額、眉、眉間、豊頬、下顎骨の出っ張り、後頭部突出に表し、薄色を施した。胸像は校舎前庭に奏楽堂を正面から見守るように建立され、桜色の万成石の台石に伊澤作曲の「紀元節」の旋律をブロンズで嵌めて統一感を持たせた。胸像に潤いある環境をと「背景に常緑樹」、「小丘に芝生」を配し、末永い保護を同校に託した。胸像は東京音楽学校のシンボルとなり、創立記念日には花輪で飾られ、胸像前は生徒たちの記念撮影の場所となった【＊5】。

（はしもと・くみこ　総合芸術アーカイブセンター大学史史料室特任助教・音楽学部非常勤講師）

＊1　音楽取調掛は明治十二年に創設された。

＊2　東京藝術大学創立百周年の昭和六十二年（一九八七）、伊澤の郷里高遠に胸像複製が建立された。

＊3　『音楽取調成績申報書』（明治十七年［一八八四］）参照。

＊4　「伊澤初代校長胸像除幕式関係」（大学史史料室蔵）および『同声会報』（昭和七年七・八月）参照。

＊5　現在は奏楽堂横の小径に移されている。

奏楽堂前にて胸像除幕式（昭和５年７月）。現在の奏楽堂とほぼ同じ位置にあった当時の奏楽堂は、上野公園内に移築保存されている

昭和10年代半ば。胸像前で記念撮影

＊Topics は 29 ページからお読み下さい。

台灣の近代美術 —留学生たちの青春群像（1895–1945）

2014年9月12日（金）から10月26日（日）まで、東京藝術大学大学美術館本館展示室3にて、「台灣の近代美術—留学生たちの青春群像」が開催された。

20世紀前半の東京美術学校には、中国、台湾、韓国などからの学生も勉学していて、とりわけ油彩画技術の習得に研鑽を積んでいた。彼らは帰国・帰郷後に、激動の時代の中でそれぞれの道を歩みながら、西洋美術を母国に普及させることに貢献して、東アジアの近代美術を開花させてきた。しかし、その実績・功績などは今日にいたっても未だに十分に検証されたとは言えない。そこでこの企画は、東京藝術大学大学美術館と国立台北教育大学北師美術館が共同で、台湾からの留学生の主要な作品約50点を東京藝術大学大学美術館に集めて、留学生たちの軌跡と台湾における近代美術の展開を紹介した。

2. [9.23–10.19]

平櫛田中コレクション —つくる・みる・あつめる—

橋本平八《猫》1924年

2014年9月23日（火・祝）から10月19日（日）まで、東京藝術大学大学美術館本館展示室2にて、「平櫛田中コレクション—つくる・みる・あつめる—」が開催された。

1944年（昭和19）から東京美術学校彫刻科木彫部教授となり、後進の指導を行った平櫛田中は、1950年、自作27点を含めた合計133点の彫刻作品を東京藝術大学に寄贈した。その後も寄贈は続けられ、合計149点に及ぶ作品群は、平櫛田中コレクションとして大学美術館に収蔵されている。ひとりの作家の感性と視点で選ばれたこれらの作品は、藝大での彫刻教育研究に必要不可欠な資料として広く有効に活用されている。本展覧会では、このコレクションの中から、『三井高福像』（1937年）、『鏡獅子』（1940年）などの自作の彩色作品や、橋本平八、辻晋堂らの作品など、選りすぐりの名品を公開した。

3. [11.13–11.26]

河北秀也 東京藝術大学退任記念 地下鉄10年を走りぬけて iichiko デザイン30年展

河北秀也東京藝術大学美術学部デザイン科教授の退任にあたり、2014年11月13日より11月26日までの会期で、「地下鉄10年を走りぬけて iichiko デザイン30年展」と題した展覧会を東京藝術大学大学美術館本館3階の展示室で開催した。

河北教授は「人間の幸せという大きな目的のもとに、創造力・構想力を駆使して私たちの周囲に働きかけ、様々な関係を調整する行為がデザインである」と考え、活動をつづけてきた。東京藝術大学在学中に手がけた「いちごみるく」のパッケージデザインや、東京地下鉄の路線図、大きな話題となった旧営団地下鉄のマナーポスターシリーズ（1973〜82年）、1983年から現在まで30年以上にもわたる iichiko デザイン（焼酎「いいちこ」の商品企画・パッケージ・テレビ CM・ポスター・雑誌広告・出版物など）を中心に、数多くの作品を展示した。

4. [1.5–1.15]

東谷武美退任展

2015年1月5日から1月15日まで、東京藝術大学大学美術館陳列館にて、「東谷武美退任展　日蝕・水の肖像」が開催された。東谷武美は、1971年東京藝術大学大学院美術研究科版画専攻に入学し、駒井哲郎、中林忠良の指導を受け版画表現研究に励んだ。1975年から1979年まで東京藝術大学版画研究室非常勤助手として、その後1998年から2001年まで東京藝術大学非常勤講師として版画指導にあたり、2005年より油画・版画の助教授として就任し、2008年より教授として学生に指導を行ってきた。

本展覧会では、退任記念としてリトグラフ（石版画）と銅版画の作品を海外・国内展における受賞作を中心に一同に展示し、東谷の版画作品を通して、現代版画とは何かを問いなおす場となり、その魅力を垣間見る展示を試みた。また、版画の表現と技術の理解を深めるために会場における刷りの実演を行い、描画から整版行程、原版（石版石、アルミ版、銅版）もあわせて展示した。

奏楽堂 SOGAKUDO

1. [10.8]

和楽の美 邦楽絵巻 「義経記〜静と義経を巡って」

音楽学部と美術学部が手を携えて新しい舞台芸術の創造を目指す〈和楽の美〉公演が、10月8日（水）奏楽堂にて開催された。今回の演目は、織田紘二氏の脚本・演出による「義経記〜静と義経を巡って」で、舞台美術は建築科の北川原温教授が担当した。義経役に歌舞伎の中村又五郎さん、静役に女優の山吹恭子さんをお迎えし、おふたりの語りと能楽「船弁慶」、萩岡松韻作曲「静」など、新旧の邦楽曲をとりまぜて、悲運の武将・源義経とその愛妾・静御前の悲哀を描き出した。

2. [10.13 / 10.19]

ピアノ・シリーズ「音楽の至宝」 Vol.2 ベートーヴェンのソナタ 第3回「傑作の森」 第4回「ウィーン時代後期」

本学が誇るピアノ科の教授陣が競演する「ベートーヴェンのソナタ」演奏会が開催された。ベートーヴェンが生涯に残した32曲のピアノソナタは、ピアノ音楽の「新約聖書」にもたとえられる金字塔的な作品群。2014年度のピアノ・シリーズは、それらを中心に弦楽科教授との共演によるヴァイオリン、あるいはチェロのためのソナタも加え、代表的な作品を年代順に紹介していくという大変意欲的なプログラムだった。その演奏は極めて水準が高く、ベートーヴェン人気もあって、会場は大勢のお客様で埋まった。

3. [11.30]

藝大プロジェクト2014 「シェイクスピア〜人とその時代」 第4回「東西が響き合うシェイクスピア」

2014年はイギリスの詩人・劇作家、ウィリアム・シェイクスピアの生誕450年の記念の年で、藝大プロジェクトでは、彼の業績に様々な角度から光を当てる「シェイクスピア〜人とその時代」シリーズを4回にわたって開催した。その最終回は日本の古典芸能に翻案されたシェイクスピアをテーマに、イギリス演劇の研究者、門野泉さんのレクチャーに続き、コンサートでは、『シンベリン』に基づく創作落語『八丁櫓』が古今亭志ん輔師匠によって語られた後、『夏の夜の夢』を今回新たに邦楽アンサンブルに翻案したオリジナル作品『夢現恋悪戯（ゆめうつつこいのたわむれ）』が上演された。

4. [2.19]

2014年度 モーニング・コンサート第13回

モーニング・コンサートは、選抜された優秀な学生により、1972年から40年以上継続してきた研鑽と修養の場となっており、より一層の高度化と発展を目的として行われた有料化から既に2年が経過しました。この間の総入場者数は、2013年度：8674名から2014年度：9658名と増加し、無料で開催していた2007年度：9086名の実績を超えるまで回復し、また、2014年度最終開催日に開始した2015年度のチケット（全13回セット）の先行販売では、その初日の販売数が91セットと、前年度の総販売数（90セット）を1日で超え、この演奏会が、いかに多くのお客様のご理解をいただいているかを感じることとなりました。この度、附属図書館の改修工事に伴い、藝大アートプラザが、2015年3月30日（月）からしばらくの間、休業するため、前売券の販売を、東京文化会館チケットサービスに移行させていただきます。お客様には、引き続きモーニング・コンサートをご愛顧いただきますようどうぞよろしくお願いします。

絵画科油画専攻学部3年生56名による、学外会場での展示を12月12日から12月25日までの2週間アーツ千代田3331にて行い、2124名の方々にご来場頂いた。学生による作品展示をはじめイベントやワークショップも連日開催され、幅広い年齢層の方々に参加頂くことができた。芸術を通して様々な交流の場を提供することができたと考えている。

7. [1.26–1.31]
東京藝術大学卒業・修了作品展

第63回となる、「東京藝術大学卒業・修了作品展」(1月26日〜31日)が東京都美術館および東京藝術大学構内にて開催された。

「卒業・修了作品展」という名称が示すとおり、学生にとっては入学から卒業・修了までの集大成となる作品を発表する展覧会である。また、来場される多くの藝大ファンと作品を通して親交をはかり、考察を深めることのできる最高の機会となっている。

展示活動においても学生自身が主体となり行われている。美術館利用の知識や、企画運営上の注意点、危機管理などもあわせて学びを深めてきた学生にとっては実地訓練の場となった。

会期中は、雪まじりの天候に見舞われたものの、約2万3000人の来場者に恵まれた。特に大学美術館内のエントランスにて来場者を迎えた晴れやかな創作の数々は、多くの関心を得ると共に、社会の中に芸術がもたらす「未来への活力」を象徴していた。

来年度の第64回「東京藝術大学卒業・修了作品展」の開催も同期日で決定しており、学内では次なる主役たちが晴れ舞台に向けそれぞれの研究を深めている。

音楽 MUSIC

1. [11.20–11.30]
邦楽器が受け継ぐ
技・形・音
こめられた丹精

邦楽器の製作と技の継承に焦点をあてた本展は、11月20日から11日間、東京藝術大学正木記念館で開催された(主催：東京藝術大学、助成：日本学術振興会、後援：台東区・台東区教育委員会・東京邦楽器商工業協同組合、企画製作：小泉文夫記念資料室)。「精緻な職人技の賜物」というべき邦楽器は、邦楽離れや素材入手の難しさなど、深刻な課題を現在抱えている。それでもなお粛々と製作に励む職人の姿は、太鼓と三味線胴の革張り実演や、動画、展示品を通して来場者に深い感銘を与えた(協力：有限会社南部屋五郎右衛門、ねぎし菊岡三絃店ほか)。鳴り物を多用する上方落語の上演も会場を大いに沸かせた(出演：林家染雀ほか、藝大フレンズ賛助金助成事業)。「東京下町の伝統と邦楽器製作の関連」をサブテーマとする本展は、邦楽器を軸に物と人と環境の繋がりを見直す場を提供したと言えるだろう。

映像 FILM & NEW MEDIA

1. [9.6]
OPEN INNOVATION
最新映像技術と創作感性の融合
〜映画『Present For You』の世界

◎アニメーション専攻

9月6日(土)、横浜校地馬車道校舎大視聴覚室において公開イベントとして、劇場版3D映画『Present For You』を取り上げ、最新技術と創作感性の関係を考察した。「立体視」「映画」「パペットアニメーション」を駆使した、世界でも稀にみる実験精神に富んだ本作品を鑑賞した後、監督の臺佳彦氏とテクニカルディレクター西山理彦氏をゲストに迎え、立体視映像研究にかけて第一人者である大口孝之氏を聞き手に、その作品の魅力と、作品を支える技術的アプローチの深さ、大胆な試みについて掘り下げた。

2. [9.20]
OPEN THEATER 2014　第1回

◎映画専攻

9月20日(土)、誰でも訪れることが可能であり、映画をより多くの人の目に触れてもらうために、従来の室内の上映方式ではない野外上映を試みた野外上映企画を開催した。横浜校地新港校舎という、港町横浜らしい海に面した絶好のロケーションでの開催である。今年は歴史に残る日本の巨匠監督の名作をぜひお客様に親しんでいただくべく、マキノ正博監督、長谷川一夫主演『剱雲鳴門しぶき』(『阿波の踊子』改題短縮版、1941年)を上映した。しかも本作は港町が舞台であり、上映会場で聞こえる船の汽笛の音と、映画のなかで聞こえる汽笛の音が混じり合う、そんな特別な時間を過ごしていただき、多くのお客様に好評を博した。

3. [1.16–1.18 / 1.23–1.25]
メディア映像専攻修了制作展・
修士1年次成果発表展
Media Practice 2014–15

◎メディア映像専攻

1月16日(金)から18日(日)、横浜校地新港校舎において第8期生が取り組んできた研究成果である修了制作作品を、横浜市民をはじめとした一般の方々に公開した。第18回文化庁メディア芸術祭アート部門審査委員会推薦作品に選出された曽根光揮作『まだ自分である』(旧題『写場』)をはじめ、学生の力作12点が展示され、好評を博した。

また、1月23日(金)から25日(日)、PART2として、修士1年が取り組んできた映像表現の研究成果発表展を開催した。第9期生15名の作品が展示され、多数の入場者があった。

4.
こどものためのシアター

普段は大学院で教えている3人の教授たちが、子どもが見るべき映像作品をセレクトし、専門的で楽しい解説とともに上映するもので、次世代の子どもたちの映像鑑賞教育に取り組む企画として開催した。

[2.7]
第1回「パワーズ・オブ・テン」
講師：佐藤雅彦
(メディア映像専攻教授)

科学映像の面白さについて、自身が制作した映像作品に実験を織り交ぜながら講義が行われた。火のついた長短2本のろうそくにコップをかぶせてどちらが先に消えるのか、一定の温度で元の形状に復元する形状記憶合金のバネを伸ばしてお湯に入れると本当に復元するのか、といった佐藤先生の科学映像で登場した実験が実際に目の前で行われ、「この世界には、すごい力があふれていることを具体的に知ってほしい」「実際に観察し、試して考察することから分かる本当に面白いことを捕まえてほしい」という佐藤教授の想いに熱心に聞き入る姿が多く見られた。

[2.8]
第2回「ジョルジュ・メリエス作品集」
「バスター・キートン作品集」
講師：筒井武文
(映画専攻教授)

「写真を動かしてみたい」そんな思いを持った人たちが作った、映画創成期の作品や、「人を驚かせたい、楽しませたい」そんな想いのこもったコメディ作品を子どもたちは鑑賞した。映画の原点は写真にあった。一枚一枚の写真を連続で見ることで動いているように見えることを発見した人々が映画という新たな文化を生みだした。創成期の作品は、一見すると学芸会のようだが、当時の最先端技術を用いて制作されたことなどが説明された。子どもたちは、映画を見に来るお客さんを驚かせるようなトリック映画や、体を張って現実から離れた動きで人々を笑わせるコメディ映画を鑑賞するなかで、映画の歴史や仕組み、制作現場の様子に思いを馳せていた。

[2.10]
第3回「狐と兎」
講師：山村浩二
(アニメーション専攻教授)

「紙に描いた絵がどうして動くのでしょうか？　実は、“どうやったら”動いて見えるのかは分かっているのだけれど、“どうして”動いて見えるのか、はまだ分かっていません」そんなアニメーションの不思議なお話から授業がスタートした。空気、空間、光と影、質感。いつも私たちのまわりを包んでいる空間を大切にしているロシアで作られたアニメーション作品を通して、他の国の文化や普段目にするアニメ作品とは違う表現や技法、友だちを大切にする気持ちを発見する機会となった。

美術館 ART MUSEUM

1. [9.12–10.26]

Topics

2014.8–2015.2

1. [9.5–9.7]
2014年度 藝祭

9月5日(金)より3日間、上野校地で「藝祭」が開催され、初日には恒例の御輿パレードが行われた。

2. [9.29]
藝大アーツ学生サミット2014 —横浜アート物語成果発表会

9月29日(月)横浜キャンパス馬車道校舎にて、「藝大アーツ学生サミット2014—横浜アート物語」成果発表会を開催した。

「藝大アーツ学生サミット2014—横浜アート物語」とは、横浜市・泉州市・光州広域市を中心にした、日中韓3か国3分野(美術・音楽・映像)の大学生・若手研究者による共同制作プロジェクト。

成果発表会では、宮田学長、横浜市副市長をはじめ大変多くの方にご来場頂き、相互の文化芸術を語り合い、理解を深め、異文化交流を積み重ねながら作りあげた美術・映像作品や演奏を発表した。なお、今回の交流事業の成果として完成した作品は横浜市へ贈呈する。

第2部では、本サミットに参加したすべての学生・研究者が、交流事業を通じて得たものとこれからの交流についてディスカッションを行い、多くの意見が出され、大盛況のうちに終了した。

3. [10.21–10.26]
藝大アーツイン丸の内2014

10月21日(火)から26日(日)まで、「藝大アーツイン丸の内2014」が開催された。初日はオープニング、「三菱地所賞」授賞式、「平田オリザの時間」の各プログラムが行われ、多くの方が訪れた。なお、オープニング直前には、メディア内覧会が行われ、本イベントアンバサダーである、日本エレキテル連合のおふたりが登場し、会場を沸かせていた。

会期中は、「GEIDAI カフェ」がオープンし、オリジナルメニューを提供したほか、様々なイベントが毎日繰り広げられた。

美術 FINE ARTS

1. [9.20–11.3]
TRANS ARTS TOKYO 2014 (絵画科油画研究室)

2012·13年に続き、神田の開発に伴い生まれた一時的な空間を使ったクロスジャンルなアートプロジェクト「TRANS ARTS TOKYO 2014」を9月20日～11月3日に開催した。今年は、家族がリビングで過ごす時間のように、人々が集まり対話を生み、多様な価値観を交換することができる場をテーマとして、多様なコンテンツが集結した。東京のど真ん中に出現した空き地を利用して、気球の飛行や音楽ライブ、巨大アート作品の展示、キャンプ体験、神田カレー&スポーツエキスポなどを開催。異質なものたちが混ざり合い、新しい東京のクリエイティビティ、魅力を引き出すことができた。

2. [11.4–11.16]
日本・台湾 現代美術の現在と未来—ローカリティとグローバルの振幅

過去に台湾から東京美術学校に来た留学生は、日本で学んだ芸術を台湾に持ち帰り、台湾に根付いた芸術と融合させ、新しい芸術文化として次世代に継承してきた。美術学部では、そのような文化交流の影響を受けた日本と台湾の若手アーティストが参加する「日本・台湾現代美術の現在と未来—ローカリティとグローバルの振幅」展を企画し、11月4日から16日までの間、陳列館とアートスペースにおいて開催した。

展示では、日台それぞれから対比すると興味深い作風の作家を選抜し、作品の発表を通して共通点や相違点を見つけながら、双方の美術の現状を紹介した。会期中にはシンポジウムも行い、共通した問題意識、かつ異なった社会的条件も持つ日本と台湾の美術における現状を、比較考察することができた。

台湾文化部と共催した本事業により、日台双方が互いの文化をより良く知り、文化尊重の気運を高められたと考える。

3. [11.5]
ミャンマー・バガン遺跡の複製壁画をミャンマー文化省へ寄贈

11月5日、ミャンマー連邦共和国(以下、「ミャンマー」)の首都ネーピードーにおいて、大学院美術研究科宮廻正明教授からミャンマー文化省副大臣のサンダーキン氏(Daw Sanda Khin)へ、ミャンマー文化省からの依頼により制作したミャンマー・バガン遺跡の複製壁画3種25点を寄贈した。

この複製壁画は、11月12日～13日にネーピードーで開催され、安倍晋三首相も出席した ASEAN(東南アジア諸国連合)サミット2014においてミャンマー政府から ASEAN+3の各国首脳へ記念品として贈呈された。

本件は、本年10月初旬より本学とミャンマー文化省の双方の合意形成により急速に進展したグローバルな文化外交プロジェクトであり、宮廻教授がミャンマー文化省に対し、本学独自の文化財複製特許技術(2010年7月30日特許第4559524号)の紹介とともに実際に制作した複製壁画サンプルを提示したところ、本物と同等のクオリティーを創出できる本学の文化財複製特許技術にミャンマー文化省が強い関心をもち、本学に対し正式にミャンマー・バガン遺跡の複製壁画制作の依頼があったもの。

その後、ミャンマー文化省との折衝を重ねつつ、急遽組まれた本学の調査団によるミャンマー・バガン遺跡での現地調査で得られた複製壁画の高精細デジタルデータおよび3D 計測データを元に複製壁画の制作に着手し、今回のミャンマー・バガン遺跡の複製壁画3種25点の寄贈が実現した。

4. [11.30]
第2回国際木版画会議 (絵画科油画研究室)

第2回国際木版画会議は、美術学部構内を会場に「木版画における海外の表現者、研究者と、日本の彫り師、摺り師や日本の素材、道具メーカーをつなぐこと」、「国内外の専門家が相互に凸版技法の実践と理論を語り合い、情報の共有化を計ること」をテーマに開催された。本会議は、「論旨発表」「ワークショップ・デモンストレーション」「国際木版画展」「アーティストブック展」「ポートフォリオ展」「グループプロジェクト展」のプログラムで構成され、175名(国内62名、国外22か国113名)の参加者により、多彩な発表、相互の活発な意見交換が行われた。また、美術館で行われた特別企画展「木版ぞめき—日本でなにが起こったか」は15日間という短い会期ではあったが、6038人の来場者を集め盛況のうちに終了した。

5. [12.4]
『アンギアーリの戦い』展 記者発表

芸術学科西洋美術史研究室では、今年5月から開催される「レオナルド・ダ・ヴィンチと《アンギアーリの戦い》展」(於東京富士美術館)のプランニングを2014年度の受託研究として行った。『アンギアーリの戦い』はレオナルドが計画した野心的な壁画だったが未完成に終わり、その構図の一部は『タヴォラ・ドーリア』と呼ばれる板絵(現在フィレンツェのウフィツィ美術館所蔵)によって記録されている。この作品を中心として、『アンギアーリの戦い』をテーマとする国際的展覧会の内容構成を提案するのが受託研究の課題であり、助手・大学院生を中心に計80点ほどの構成案を作成して提案した。昨年12月4日、開催に先立って展覧会の記者発表会がドメニコ・ジョルジ駐日イタリア大使の臨席のもと大使公邸で開催され、多くのマスコミ関係者が集った。

6. [12.12–12.25]
美術学部絵画科油画専攻3年 一二(ひとふた)展

藝大基金寄附者ご芳名　[2014.8–2015.1]

東京藝術大学基金(藝大基金)へ温かいご支援を賜りました皆様に、心より深謝申し上げます。本号では、2014年8月から2015年1月末日までに寄附申込いただいた皆様を掲載させていただきます(掲載をご承諾いただけた方のみ)。

東京藝術大学は、皆様からのご支援により支えられています。末永くご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

《個人の皆様》

小田 式子 様	100万円	山﨑 行夫 様	2万円	鞍馬 邦明 様	1万円	飯田 豊子 様	5000円
北野 寛子 様	100万円	井橋 光平 様	2万円	坂口 悰治朗 様	1万円	岩根 雄次郎 様	5000円
貫 行子 様	100万円	小寺 秀仁 様	2万円	古川 誠 様	1万円	三上 一郎 様	5000円
古沢 昭 様	30万円	磯貝 紀枝 様	1万円	石黒 秀子 様	1万円	川名 節子 様	3000円
植木 武裕 様	30万円	根田 穂美子 様	1万円	岡本 達三 様	1万円	千葉 一彦 様	
松村 一義 様	10万円	鈴木 隆司 様	1万円	谷村 秀 様	1万円	花﨑 範子 様	
八木 健 様	5万円	望月 光 様	1万円	田所 厚一郎 様	1万円	清水 晴雄 様	
藤間 勢波 様	5万円	三吉 浩樹 様	1万円	佐藤 節子 様	1万円		
木邨 系紀 様	3万円	玉置 保子 様	1万円	嬉野 紀子 様	6000円		

《法人の皆様》

株式会社 平成建設 様	6000万円
株式会社 スタートゥデイ 様	50万円
株式会社 東都文化財保存研究所 様	30万円
中川特殊鋼株式会社 様	20万円

お問い合わせは総務課渉外事業企画室：050-5525-2400
藝大基金 WEB サイト： http://fund.geidai.ac.jp/

東京藝術大学大学美術館　2014 年 9 月～ 2015 年 1 月　来館者数報告

会期	内容	来館者数
8月30日(土)～9月14日(日)	第2回国際木版画会議特別企画展 「木版ぞめき —日本でなにが起こったか—」	6038
9月12日(金)～10月26日(日)	台灣の近代美術 —留学生たちの青春群像(1895–1945)	10493
9月23日(火･祝)～10月19日(日)	平櫛田中コレクション —つくる･みる･あつめる—	6944
10月31日(金)～11月3日(月･祝)	美術教育研究会第20回大会企画展 つくったり 考えたり —美術教育からのメッセージ—	1975
11月13日(木)～11月26日(水)	河北秀也　東京藝術大学退任記念 地下鉄10年を走りぬけて　iichiko デザイン30年展	9462
12月18日(木)～12月25日(木)	東京藝術大学 大学院美術研究科　博士審査展	4616
1月26日(月)～1月31日(土)	第63回　東京藝術大学卒業･修了作品展	13246

東京藝術大学奏楽堂　2014 年 9 月～ 2015 年 1 月　入場者数報告

開催日	内容	入場者数
2014年9月10日(水)	モーニング･コンサート第10回　藤田 華(Cl)、鈴木 梨香(Vn)	691
11月13日(木)	モーニング･コンサート第11回　大久保 祐奈(Fl)、高橋 奈緒(Vn)	770
11月27日(木)	モーニング･コンサート第12回　石若 駿(Per)、三輪 莉子(Vn)	929
10月4日(土)	藝大オペラ定期　第60回　第1日	636
10月5日(日)	藝大オペラ定期　第60回　第2日	595
10月8日(水)	藝大21 和楽の美　邦楽絵巻「義経記～静と義経を巡って」	576
10月12日(日)	上野の森オルガン･シリーズ2014 異国の J.S.BACH フランス編	507
10月13日(月)	ピアノ･シリーズ「音楽の至宝」Vol.2「ベートーヴェンのソナタ」第3回 傑作の森	720
10月19日(日)	ピアノ･シリーズ「音楽の至宝」Vol.2「ベートーヴェンのソナタ」第4回 ウィーン時代後期	782
10月24日(金)	藝大フィルハーモニア定期演奏会(第365回藝大定期) 「生誕150年 オール･R. シュトラウス･プログラム」	527
10月26日(日)	ウィーンの魔笛　ヘンリク･ヴィーゼを迎えて	456
11月1日(土)	「シェイクスピア ～人とその時代」第3回 時空を越えたシェイクスピア	378
11月7日(金)	うたシリーズ2014 生誕150年リヒャルト･シュトラウスの歌曲とオペラ	697
11月15日(土)	藝大学生オーケストラ第51回定期演奏会(藝大定期第366回)	1051
11月22日(土)	藝大フィルハーモニア･合唱定期(藝大定期第367回)	906
11月23日(日)	藝大定期吹奏楽　第81回	1094
11月30日(日)	「シェイクスピア ～人とその時代」第４回東西が響き合うシェイクスピア	396
12月3日(水)	邦楽定期演奏会　第81回	849
2015年1月31日(土)	藝大定期室内楽　第41回　第1日	548

編集部より

「藝大通信」編集部では、皆様からのご意見・ご感想などをお待ちしています。
今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、こちらまでお寄せください。

〒110-8714
東京都台東区上野公園12-8
東京藝術大学総務課内　藝大通信編集部
FAX: 03-5685-7760
E-mail: toiawase@ml.geidai.ac.jp

編集後記

「藝大通信」は本号より「GEIDAI TSUSHIN」と表記を改め、全体の大幅リニューアルを図りました。「研究室探訪」や「卒業生に聞く」などの人気の連載は、ページを増やし読み応えのあるものとしましたが、何より、年に２回という機会に、大学として紙媒体で伝えるべきメッセージは何なのかを吟味し、それを毎号「特集」という形で掲載するようにしました。初回の試みとなる本号では、音・美を横断して行われる「障がいとアーツ」のプロジェクトを取り上げました。どうぞこれからの「GEIDAI TSUSHIN」にもご期待ください。

展覧会・演奏会の最新情報は、
東京藝術大学公式 Web サイト
(http://www.geidai.ac.jp/)
をご覧ください。

■ 展覧会についてのお問い合わせ先
・ 東京藝術大学大学美術館
Tel. 03-5777-8600
(NTT ハローダイヤル)

■ 演奏会についてのお問い合わせ先
・ 東京藝術大学演奏藝術センター
Tel. 050-5525-2300

■ 演奏会チケットの取り扱い
・ 藝大アートプラザ
Tel 050-5525-2102
(※2015.3.29（日)まで)
・ 東京芸術大学生活協同組合
Tel 03-3828-5669
(※2015.4.1(水)より、店頭販売のみ)
・ ヴォートル・チケットセンター
Tel. 03-5355-1280
・ 東京文化会館チケットサービス
Tel. 03-5685-0650
・ チケットぴあ
Tel. 0570-02-9999
(一部携帯電話・PHS・IP 電話は
ご利用いただくことができません)
・ イープラス(e+)
http://eplus.jp/

運営

1. 早期教育プロジェクト 2014 ～夢を夢で終わらせない～

本学は、我が国では初の試みとなる、将来音楽家を目指す全国の子どもたちを対象とした「早期教育プロジェクト」を開始する。

本プロジェクトは、文部科学省「国立大学改革プラン」を踏まえた本学の機能強化の一環として構想するものだが、特に音楽分野では、世界的な状況を見た場合「早期教育」の有効性は明らかであることから、文化芸術立国を目指す我が国においても、国際舞台で活躍できる音楽家育成を推進する上で必要不可欠と考え、国立大学中唯一の芸術大学である本学の重要なミッションとして実施を決断した。

本プロジェクトでは、日本全国を対象に早期教育を実施し、幼少期から継続的・段階的に指導を行うことで優れた才能を開花させ、世界への飛躍に繋げることを目指すが、特に昨今、少子化社会において音楽家を目指す若者が減少傾向にある中、受験等様々な流れ・選択の過程で、才能ある子どもが音楽家への道を断念してしまう状況が絶えないことに鑑み、まずは子どもたちの可能性を発見して最大限伸ばし、彼らの夢を実現させてあげたいというのが我々の願いであり、本プロジェクトにおける最大の目的である。

さらに、地域における卓越人材の発掘・育成はもとより、会場に集うすべての人々が“感動”や“ときめき”を体感・共有することで地域の活性化に繋げるなど、“音楽の魅力”や“芸術の力”を活かすことで、「地方創生」の一助となればと考えている。

2014年度は、札幌及び福岡の2か所で試行的に実施するが、音楽学部長をはじめとする本学教員等が現地に赴き、公開型のレッスンを、受講料・入場料無料で実施するので、受講者のみならず地域の方々にも是非会場に足を運んでいただき、音楽をもっと身近なものとして感じるきっかけにしてもらえればと考えている。

なお、2015年度以降は、本学上野キャンパスにおける実施を含め、対象地域や対象年次等を順次拡大予定であり、さらに、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団等から誘致する世界一線級アーティストによる指導機会の提供や、「飛び入学制度」の導入など、さらに魅力的で体系的なプログラムへと発展させていく。

2. 「スーパーグローバル大学創成支援」事業において、本学構想が採択

文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」事業は、徹底した「大学改革」と「国際化」を断行し、国際通用性や国際競争力強化に取り組む大学への支援を目的としており、そのうち「グローバル化牽引型」は、これまでの実績を基に更に先導的試行に挑戦し、我が国の社会のグローバル化を牽引する大学に対する重点支援を行うもの。

このたび、本学構想「“藝大力”創造イニシアティブ～オンリーワンのグローバル戦略～」が、全国37のスーパーグローバル大学の一つに、芸術系大学としては唯一採択された。

本構想は、国内及びアジアにおいて確固たる地位にある東京藝術大学が、世界水準の強み・特色を活かし、学長の超強力なリーダーシップの下、国際連携プラットホームの構築・持続的発展を目指すものであり、グローバル人材育成機能強化や戦略的海外展開、国際プレゼンスの確立など、斬新且つ大胆なグローバル戦略を、大学の総力を結集し“オール藝大”体制により展開する。

これにより、アジアにおける中核的機関としての機能・役割を一層明確にしつつ、さらなる高み“世界の頂”を目指し、海外の大学・関係機関等との連携基盤を活かしながら、世界トップアーティスト育成をはじめ、ガバナンス機能強化等大学改革を総合的に推進することにより、世界の有力芸術大学をも凌駕・超越する国際ブランド“藝大”への飛躍を目指す。

併せて、本学が立地する“上野の杜”の芸術文化施設・文化資源等、世界屈指の潜在力を活かし、本学が推進するグローバル人材育成と、2020年東京オリンピック開催を視野に推進する“上野「文化の杜」新構想”を、本学がコンダクターとなって有機的に連動させ、藝大の“人財”等ポテンシャルを活かした「文化プログラム」の実行等シナジー効果を演出することで“上野の杜”を「国際遊学都市」に飛躍させ、パリやロンドン等、世界を代表する芸術文化都市に比肩する「国際芸術文化拠点」への持続的発展に繋げ、さらに文化庁・東京都等関係機関との連携により、多様な文化資源のシームレスな流れを創出し、国際的都市“東京”の芸術文化ネットワーク構築を目指す。

今回の採択を契機に、宮田学長の下、“オール藝大”体制により、アジアの芸術系大学のフラグシップとして、さらには国家戦略実行のフロントランナーとして、“世界の頂”を目指した先導的取組を実行していく。

イベント

1. バッハ国際コンクール１位の藝大2年岡本さん 学長へ受賞報告 [9.3]

2014年7月にドイツ・ライプツィヒにて開催されたバッハ国際コンクールのヴァイオリン部門で日本人初の第1位を獲得した音楽学部2年の岡本誠司さんが、9月3日、宮田学長へ受賞報告を行った。

岡本さんは、「今回の結果は非常にうれしいが、さらに努力を重ね、レベルアップしていきたい」、「世界で活躍するためには、語学力がとても重要だということを感じた」と語った。

懇談後には演奏披露となり、コンクール1位の音色を学長の前で披露した。さらに、同席していた音楽学部の澤学部長（指導教員）と2名での演奏を披露し、学長室での世界レベルの演奏に、多数詰めかけた事務局職員からも大きな歓声が上がった。

2. 第16回「学長と語ろう こんさーと」を開催 [10.25]

10月25日（土）、本学奏楽堂にて、第16回奏楽堂トーク＆コンサート「学長と語ろう こんさーと」を開催した。

各界でご活躍されているゲストをお迎えし、「芸術の力を世界に発信しよう！」という趣旨で始まったコンサートも16回目となり、今回は薬師寺の山田法胤管主をゲストに迎え、「まほろばの心」をテーマにトークが繰り広げられた。

第2部のコンサートでは、東京藝大ウィンドオーケストラ（指揮：山本正治音楽学部教授）による演奏が行われ、大盛況の内に幕を閉じた。

3. 上野「文化の杜」新構想シンポジウム [2015.1.31]

1月31日（土）、東京藝術大学音楽学部第6ホールにて、上野「文化の杜」新構想推進会議が主催するシンポジウムが開催された。

本会議は、宮田藝大学長、青柳文化庁長官が共同発起人となり、2020年のオリンピック・パラリンピックを契機とし、上野を年間3000万人の来訪者を誇る「文化の杜」として、世界の文化交流の拠点化や東京藝術大学が中心となり上野の各機関、美術館などとの連携による「高度学芸員・アートプロデュース」などの人材育成を目的としている。

来場者は200名を超え、上野「文化の杜」新構想に対する関心の高さがうかがわれた。

開会に先立ち、昨年7月にバッハ国際コンクールで第1位となった、器楽科2年の岡本誠司さんによる奏楽があり、その後、共同発起人の青柳文化庁長官による開会の挨拶があった。

第1部の「文化の杜」新構想（中間報告）および意見募集結果の公表では、WG 座長の北郷理事より、今までの WG での検討内容の報告があった。

第2部のパネルディスカッションでは、モデレータを宮田学長、コメンテータを青柳長官、パネラーとして石井幹子氏、小林清氏、中谷日出氏、日比野克彦氏、森まゆみ氏が出席して、〈新たな創造発信拠点としての機能強化に向けた取組〉のテーマでパネラー各氏がそれぞれの立場から、最終報告書に向けた集客策や人材育成、上野の歴史などの発表があり、時間を忘れるほどの充実した内容となった。

1

学長室での演奏披露（左：岡本さん、右：澤音楽学部長）

2

第１部でのトーク（左：宮田学長、右：山田管主）

3

シンポジウムでのパネラー各氏